

徳川慶勝「諸品新聞書」に関する一考察

——ペリー来航・異国関連図像の紹介を兼ねて——

藤田英昭

はじめに

一 「諸品新聞書」の基本情報

二 「諸品新聞書」所収のペリー来航関連図像

(一) 久里浜上陸図

(二) 江戸湾防備関連図

(三) 再来航関連図

(四) 尾張藩軍事関連図

三 「諸品新聞書」所収の異国関連図像

おわりに

はじめに

本稿で注目する「諸品新聞書」⁽¹⁾とは、尾張徳川家十四代当主徳川慶勝の手に掛かる全四冊の文書である。巻一・二・三・五が現存しており、巻四は所在不明である。⁽²⁾この文書は、慶勝が収集した絵図や摺物などを貼り込

徳川慶勝「諸品新聞書」に関する一考察

んだ帖で、いわば慶勝オリジナルのスクラップブックといえる。「新聞」とあることから、慶勝は、文字情報だけではなく、絵画や瓦版などの図像からも時事情報を得て、自身の行動の指針としていたことがわかる。貴重な史料である。⁽³⁾なかには慶勝自身が画いた絵図もある。

この帖には、興味・関心の赴くままに慶勝が収集した画が、順不同に貼付されており、この点から画像情報に対する慶勝の関心度が判明する。本稿でも、この点に着目していきたいのだが、これまでは博物学の視点で紹介されたり、慶勝が総督を務めた第一次長州戦争など、時勢に関する風刺画の収集といったところに注目が集まってきた。⁽⁴⁾

ただし、本帖に貼り付けられた画で最も多いのは、異国情報に関するもので、とりわけ二度に亘るペリー来航とそこから惹起された海防・軍事に関わる図像は、数量においても群を抜いている。慶勝の関心および情報収集の観点からは、到底看過できない画像群である。

ペリー来航をめぐる慶勝の情報収集活動といえば、「阿蘭陀機密風説書」(別段風説書)の収集・筆写など、その予告情報に注目した岩下哲典氏の研

究がよく知られている。⁽⁵⁾しかし、本帖からは、ペリー来航後も慶勝は関連情報の収集に余念がなかったことが明瞭であり、むしろ、来航後のほうが、情報活動を活発化させていたようにすら思える。本帖の存在から、慶勝は、ペリー来航や異国関連の図像を取りまとめ、いつでも確認できるようにスクラップブックに仕立て、それを最終的に「諸品新聞書」と命名したものと看取できる。後述のように、この帖には文久・元治期の風俗・時勢に関する図像情報も含まれている。この点、何時本帖に標題が付けられ、現存する情態になったのか確定することは難しい。こうした問題もあるのだが、この「諸品新聞書」に集積されたペリー来航関連図像は、これまでに十分に活用された形跡はない。本稿で注目する所以でもある。

ところで、ペリー来航関連図像の分析では、仙台藩儒大槻磐溪がまとめた「金海奇観」乾坤二巻に関する研究がある。とりわけ、「金海奇観」に収録された画像の制作者やその伝播を分析した嶋村元宏氏の研究は注目できる。⁽⁶⁾「金海奇観」は、ペリー再来航時の状況をまとめた絵巻である。⁽⁷⁾嶋村氏は、その制作に関わった人物には、昌平黉出身者という共通項があったとし、画像情報の伝播においても儒者人脈が作用していたことを明らかにした。

とはいえ、「金海奇観」のように、ペリー来航に関わる図像の制作者を特定できる例はそう多くはない。むしろ特定は困難といえる。大久保利謙監修『黒船来航譜』(毎日新聞社、一九八八年)は、鳥取池田家・長府毛利家・津山松平家・越前松平家・松代真田家など、さまざまな大名家に伝来したペリー来航関連絵巻や図を多数掲載した充実した図鑑であるが、図像制作者に関しては、岩壁義光氏が解説で指摘したとおりといえよう。⁽⁸⁾

岩壁氏の指摘は、「諸品新聞書」に貼り付けられた図像においても当て

はまる。しかし、本帖に貼られた絵図類は、尾張家に伝来し、しかも当主慶勝の目に触れ、さらに慶勝によってスクラップブックに仕立てられたという点で、独自の価値を有するものである。⁽⁹⁾ペリー来航に関する慶勝の情報収集活動を具体的に明らかにできるだけではなく、慶勝の興味・関心および個性を追究する上でも、極めて有効な史料群なのである。

本稿では、まず「諸品新聞書」の成立に関わる点について可能な限り言及する。そのうえで、関連文書とつき合わせながら、いくつかの貼付図像を紹介していきたい。その際には、慶勝の興味・関心といった点も重視していく。

なお、嘉永・安政期においては、慶勝の諱は「慶恕」であるが、本稿では一般的によく知られている「慶勝」で統一する。また、文中に引用した史料の読点、傍注、傍線、傍点などは引用者によるものである。

一 「諸品新聞書」の基本情報

冒頭でも指摘したように、「諸品新聞書」は巻一・二・三・五の全四冊で構成されている。しかし、もともとは別の標題を持つ帖であったことをまず指摘しておかなくてはならない。

そもそも、「諸品新聞書」という書名は、帖に直接書かれた書名ではなく、貼り付けられた題簽によるものである。題簽の筆は慶勝による。ただし、よく見ると題簽の下には、本帖の本来の標題が書かれているのである。巻一・二には、それぞれ慶勝の手で「諸画縮図」と記され(図1参照)、同様に、巻三も「海国図絵」とある。しかし、巻五の場合は、帖に直接「諸品新聞書 五」と墨書がある。つまり、慶勝は、ある時点で、絵図を貼り付けた

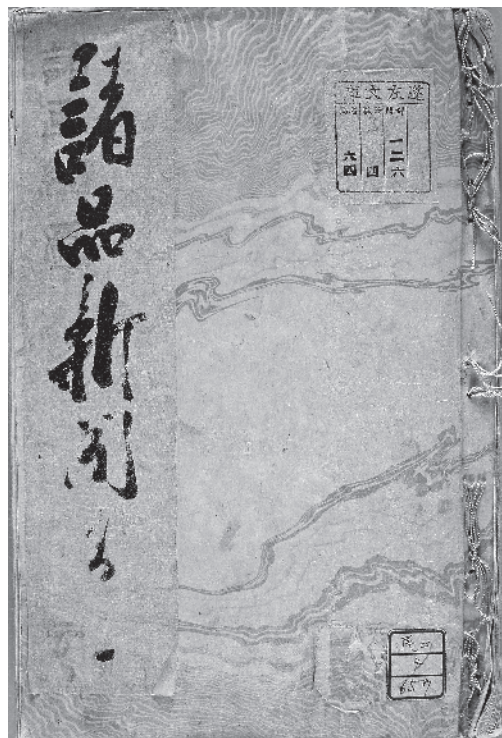


図1 「諸品新聞書」巻一
左側題簽の下に「諸画縮図」と見える。

帖をまとめるに際して、かつて集積した「諸画縮図」二冊と「海国図絵」一冊も、併せて「諸品新聞書」とし、一括したものと推察できるのである。

なお、巻五所収の図像は、元治元年（一八六四）の時勢に関する摺物や絵図がほとんどである。水戸天狗党の進軍に関わる美濃国周辺図や、「広嶋御宿陣附」「安芸厳島神社図」「防州岩国錦帯橋図」「安芸国銀札」など、第一次長州戦争時の広島滞陣中に慶勝が収集したと思われるものである。そうすると、「諸品新聞書」が一括してまとめられたのは、慶応期以降と想定できるように思われる。巻五の貼付図像も興味深いのだが、本稿で注目するペリー来航および異国関連情報とは直接関わりないので、巻五は別の機会に検討したい。

その意味で、本稿では異国関連図像が多く含まれている「諸品新聞書」巻一・二・三を中心に取り扱う。この三冊がもともと別物であったこと

は、前述したような旧名の違いからもわかるが、それゆえに慶勝所用の文庫に別々に収納されていた。すなわち、「諸品新聞書」巻三（海国図絵）の裏表紙に、「クツワ印」と慶勝筆の墨書がある。これは、慶勝の御手許文庫の種類を指している。¹⁰

慶勝には複数の「御側御書物目録」が遺されている。これは、折に触れて御手許文庫の整理をしていたことの現れと推察される。例えば、「御側御書物目録」（旧蓬左二二六・七三・一、以下Aとする）によると、慶勝には「朱丸印御本箱」「白丸印御本箱」「黄丸印御本箱」「黒丸印御本箱」「轡印御本箱」「朱竹御本箱」「白丸黒星印御本箱」「御筆箱入」「波濤御文庫」「朱丸星黒印御箱」といったさまざまな御手許文庫があった。しかし、別の「御側御書物目録」（旧蓬左二二六・七三・二、以下Bとする）には、「葵御箱」「馬御箱」「朱丸御本箱」「白丸御本箱」「轡印御本箱」「黄丸御本箱」「大御本箱」「弓矢御本箱」「六番御本箱」「銀之御筆箱入」「用箱」「別箱」「波ノ御文庫」「金之御筆箱入」「新本箱」などが記載され、Aと同様の「御本箱」の他にも多くの種類があったことがわかる。Aには書物の入れ替えを示す註記があったり、慶勝によって「不見」と記載された書物も記載されているので、これが整理の痕跡といえる。

裏表紙に「クツワ印」（轡印）と記された「海国図絵」（のちの「諸品新聞書」巻三）は、実際にはA・Bの「轡印御本箱」には記載されず、A「白丸印御本箱」とB「白丸御本箱」に収納されていた（表1参照）。裏表紙の墨書は、慶勝が「海国図絵」を「白丸御本箱」から「轡印御本箱」へと、入れ替えようとしたことを示唆したものであろうか。

また、「諸品新聞書」巻一・二の旧名である「諸画縮図」は、Aに記載はなく、B記載の「弓矢御本箱」に記載がある。そうすると、Aの後にB

〔表1〕「白丸印御本箱目録」

A「御側御書物目録」 (旧蓬左 126-73・1)所収	B「御側御書物目録」 (旧蓬左 126-73・2)所収
駿府疑問 一	国郡全図
明君(訓)一斑抄 一	傷寒論
公義御家并三卿方家譜 一	尾系譜
赤坂書并諫争録(竹腰正富書付) 二	祝融防
薩厘書面 一	防禦
柳営秘書 一 *「不見」と記載	一斑抄(明訓一斑抄)
新論 一	駿州疑問
防禦 一	戊戌封事
戊戌封事 一	新論
阿蘭陀機密風説 一	赤心秘書
鷹覚書 一	鷹名
存慮之趣 一	撰上書写(四谷御建白)
祝融防禦 一	御城書拔
市邸疑問 一 *「御下書ナリ」と記載	拾字
霜楓記 一 *「内密書也 御表紙楓葉」と 記載	手引草(海防手引草)
拾字 一	御系譜
日本史書拔并諸留 一	御花押
唐国兵乱 一 *「横本小冊」と記載	諫争録
美濃守建白写 一 *「同(横本小冊)」と記載	春夢録
四谷家系譜 一	兵部書
赤心秘書 四	野鉄砲
四谷御建白 一	角建白写
欲出不出 一	和蘭風説
角邸御建白 一	蘭人密説
国郡全図 二	存慮覚
野鉄砲 一	薩厘書
傷寒論 一	海国図絵
春夢録 一 (徳川斉昭宛徳川慶勝書翰)	浮世有様
張州記 二	世統一世紀
浮世有様 一	結城寅寿
大日本海防策 一	尾張系譜
建白草稿 二	
十一ヶ条草稿 一 (阿部正弘宛徳川慶勝質問状)	
覚書 一	
勝繰合算 一	
海国図絵 一	
蘇莫者 一	
龍笛穴名 一	
秦壽手記写 一	
街談 一	
御花押留 一	
海防手引草 一	
第十一ヶ条目草稿 一 *「重書」記載	

がまとめられた可能性があるが、興味深いのは、A記載の「朱丸星黒印御箱」に収納されていた絵図が、「諸画縮図」(のちの「諸品新聞書」巻二)に貼り付けられていたのである。

表2にA記載の「朱丸星黒印御箱」に収納されていた書物・図と、この箱に収納されていた図と同様の図が収納されているB記載の「弓矢御本箱」の一覧を示した。結論から言えば、「朱丸星黒印御箱」の3「陣立十二枚」、5「遍法銃車 一」、12「日本製バツテラ 一」、23「クシユンコタン台場之図 一枚」、27「柳都海岸略図 一枚」は、「諸画縮図」に貼り付けられた図である。B「弓矢御本箱」には、表記は違うものの、A

「朱丸星黒印御箱」に収納されていた図と同じと思われるものが多く含まれているが、上記の五点は見られず、恐らく、B「弓矢御本箱」にある28「諸画縮図」に一括されたのである。ただし、Aの27「柳都海岸略図」はBの12「海岸略」と同様のものかも知れない。しかし、この図は摺物である。同じものが複数あったとしても不思議ではない。その他、「朱丸星黒印御箱」にあつて、「弓矢御本箱」に収納されていない図で、7「蘭船 一」、10「異船絵図面 一袋」、19「蝦夷図 五枚」、22「品川築嶋之図」も、「諸画縮図」に一括された可能性がある。実際に「諸画縮図」からはこれらの図を多く見出せるが、どれが「朱丸星黒印御箱」にあつた図なの

〔表2〕 御側御書物目録

A「朱丸星黒印御箱目録」		B「弓矢御本箱」	
1	大日本海 一	1	大樹公御召
2	外夷旗章 一	2	浦賀軍船
3	陣立 帙入 十二枚	3	家老用人順書
4	丙丁録 一	4	外国旗印
5	遍法銃車 一	5	長沼軍法
6	師崎図 二	6	軍法
7	蘭船 一	7	師崎
8	火輪船 一	8	大日本海
9	西洋舶半裁図解 一	9	浦賀図
10	異船絵図面 一袋	10	路程
11	蕃舶之図 袋入 四	11	火輪船
12	日本製バツテラ 一	12	海岸略
13	浦賀之図 二	13	内裏
14	墨夷之図 一	14	フレガット船
15	異品 一	15	丙丁録
16	米利幹舶八艘加奈川入津之図 一	16	蕃舟
17	異人行列 一	17	輿地
18	亜墨利加一条内密書 一	18	備立
19	蝦夷図 五枚	19	丸々
20	御備立 図四枚 書付一枚 五枚	20	異品一卷
21	異国船警衛之図 袋入 五枚	21	異人巻物
22	品川築嶋之図 一枚	22	加奈川入津
23	クシユンコタン台場之図 一枚	23	彼里(ペリー)
24	算術九之帰法 一枚	24	行軍
25	路程便覧 一枚	25	異人ノコト十三日
26	御錢別御出来物覚 一枚	26	ケーキトイン戦船
27	柳都海岸略図 一枚	27	師家名 二
28	桑名侯上書 一	28	諸画縮図 二
29	日本輿地全図 一	29	騎射小手
		30	秘伝書
		31	西洋舶図
		32	尾師家名前
		33	内密
		34	貌里瓦埵陣
		35	鷹捉
		36	常平倉千ノ右衛門
		37	真写影鏡説

か、特定するのは難しい。

参考までに、慶勝の「日記」^①に「諸画縮図」のことが記載されているので引用しよう。安政三年（一八五〇）五月七日の記事である。

一、頬白かわり、一昨日（五日）一覽、見事、依写させ置、大坂江持行
よし、鳥屋之はなし之事

画工 横井猪右衛門

諸画縮図三張置、

引用部分は、註（４）で示した「ミヤマホウシロ」の写生に関する記事である。すなわち、安政三年五月五日に珍しい頬白（ホオジロ）を一覧した慶

徳川慶勝「諸品新聞書」に関する一考察

るものではないので、これ以上は立ち入らない。

要するに、慶勝が所持していた絵図類は、もともと個別に御手許文庫に収納されていたが、ある段階で絵図の一部が「諸画縮図」と題された帖に貼り付けられた。それがのちに「海国図絵」とともに「諸品新聞書」としてまとめられ、現在に至ったことが明らかとなった。

二 「諸品新聞書」所収のペリー来航関連図像

それでは、「諸品新聞書」に貼付された図像を具体的に見ていこう。参

勝は、横井猪右衛門にその鳥の写生を命じた。横井は「画工」とあるが、この時御小納戸兼鷹匠頭を務めており、専門の絵師ではない。しかし、画にも通じていたことは、写実的な描写からもうかがえる。その画を慶勝は、「諸画縮図」に貼付した。したがって、「諸画縮図」の標題を持つ帖は、安政三年五月にはすでに存在していたことになる。

以上のことを踏まえると、A「御側御書物目録」の後、安政三年五月前までにB「御側御書物目録」が作成されたことが判明した。ただ、本稿は「御側御書物目録」そのものを直接分析す

考までに、「諸品新聞書」巻一～三の図像目録を、文末に付表1～3として提示した。適宜参照されたい。

まず、嘉永六年（一八五三）のペリー来航と翌年の再来航に関わる図像に注目する。なお、巻一の後半部分にある元治元年（一八六四）の京都風俗に関する摺物・風刺画などについては、巻五と同様、稿を改めたい。

最初に、前提として指摘しておきたいのは、慶勝はペリー来航も再来航もいずれとも名古屋で迎えていたことである。慶勝は、嘉永六年三月二日に江戸を出立し、同一日に名古屋に到着、この間六月三日にペリーが浦賀に来航し、九日に久里浜でアメリカ大統領の国書の受け渡しがあった。

七月頃、慶勝は、老中阿部正弘に宛てた書状で、異船の動きは計りがた、江戸近海のみ力を尽くして、意外な場所へ来航されては大変、領国の周辺は京都・伊勢神宮など「大切之要地」もある。在国して「鎮護」する心得であると述べていた。⁽¹²⁾ 慶勝が名古屋を発ったのは、翌嘉永七年三月二日である。すでにペリーはこの年の正月一六日に再来航し、三月三日に神奈川条約（日米和親条約）が締結されている。その一日前の出立である。江戸に到着したのは三月一三日で、ペリーが江戸湾を離れたのは三月二日であった。江戸到着後、慶勝は対外問題に対して幕閣に強硬論を主張するなど、活発な政治活動を展開していくのである。⁽¹³⁾

（二） 久里浜上陸図

ペリー来航に関する図像情報は、再来航時にくらべて著しく少ないという指摘がある。⁽¹⁴⁾ 幕閣や一部の有識者以外は「突然」の出来事であったこと、滞在期間がわずか一〇日間であったこと、ペリーが公の場に現れたの

が、アメリカ大統領国書を捧呈するために久里浜に上陸した一度だけであったこと、などがその理由としてあげられている。首肯できる指摘である。「諸品新聞書」所収の絵図においても、同様の傾向が認められる。

一方で、数は少ないものの、「諸品新聞書」に貼り付けられたペリー来航関係の図像は、関連すると思われる文献史料を見出せる貴重な画像史料でもある。以下、いくつか検討していきたい。

「諸品新聞書」巻二（付表2）に貼付された²³・²⁴は、六月九日にペリー一行が大統領国書を捧呈するために久里浜に上陸した時の絵図である。

²³は彩色略図である。海上には「蒸気船」と「フレカット船」の記載があり、「蒸気船」の左下には、「将官ハツテイラ船へ乗移ヨリ、久里浜着岸迄空炮十三四発、上陸人数三百人ハツテイラ船十四艘に而上ル」と説明書きがある。海上には忍藩と会津藩が警備し、海岸で川越藩と彦根藩が警備しているなかを、ペリー一行が蛇行して仮応接所に入場していく様子を図示している。左側には、仮応接所内部の拡大図も記載されている。

²⁴は、標題に「嘉永六癸丑年六月九日、於相州久里浜浦浦賀奉行北亜墨利加船共和政治州国王ヨリノ書簡請取ニ付、異人上陸之図四家御固ノ図」とある。標題は異なるものの、海岸で警備する「彦根勢陸陣」が中央に画かれた彦根城博物館所蔵「ペリー浦賀来航図」⁽¹⁵⁾と構図が同じ彩色図である。ただし、²⁴には雲形が描かれ、彦根城本よりも色合いが鮮やかである。⁽¹⁶⁾ その一方、²⁴には彦根城本にある四藩の警衛人数などは記載されていない。

「諸品新聞書」巻三（付表3）の⁴⁹～⁵³も、アメリカ人の久里浜上陸に関わる絵図で、アメリカ人の行列の様子、浦賀奉行の備図、アメリカ蒸気船図の三点である（図2）。「アメリカ人久里浜上陸惣人数五百余人」図

2①、「久里浜陣推 惣人数千百余人」(図2②)などと、人数に誤りがあるが、人数の誤報も含めてこの図は多く出回っていたようで、前掲『黒船来航譜』にも類本が多く収録されている¹⁷⁾。そのなかでも、49は南部家伝来の「外国人軍事図巻」(もりおか歴史文化館所蔵)に所収される図に近似しているように見える。

ところで、この49に関連すると思われる文書が尾張家に伝来している。江戸にいる付家老竹腰正富が、嘉永六年八月二二日付で慶勝宛てに差し出した書状である¹⁸⁾。該当部分を引用しよう。

当六月、米人浦賀久里浜と申所江上陸、願書浦賀奉行請取申候節、夷人之行列并奉行共供立并蒸気船之図、浦賀与力之者図ニ扣へ置候を借り受写候由ニ而、其比浦賀へ参り合居候者より借り申候間、写取御慰ニ奉入御覧候、源書至而之粗図、其俣ニ写申候間、甚見苦敷奉恐入候、ケ様之図所々より入御覧候儀とは奉存候得共、現在之図故是又御慰ニと奉入御覧候事ニ御座候、猶又何か珍敷義承り候ハ、可奉申上候

これによると、竹腰は、浦賀奉行与力が画いたアメリカ人久里浜上陸に関わる図を、浦賀に出向いた者から借りたとのことで、名古屋にいる慶勝

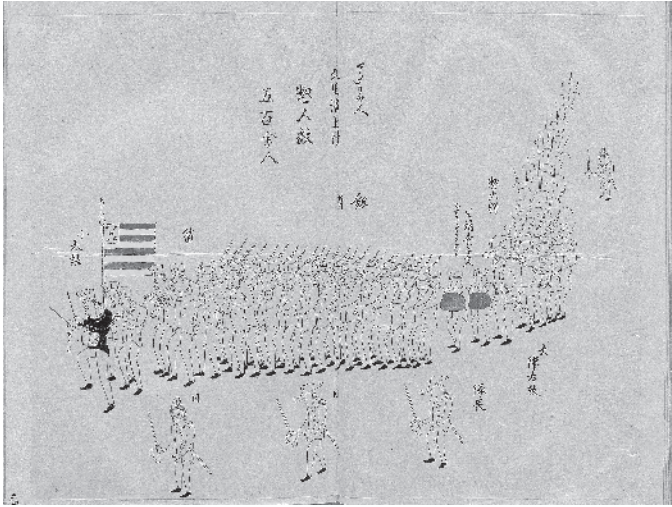
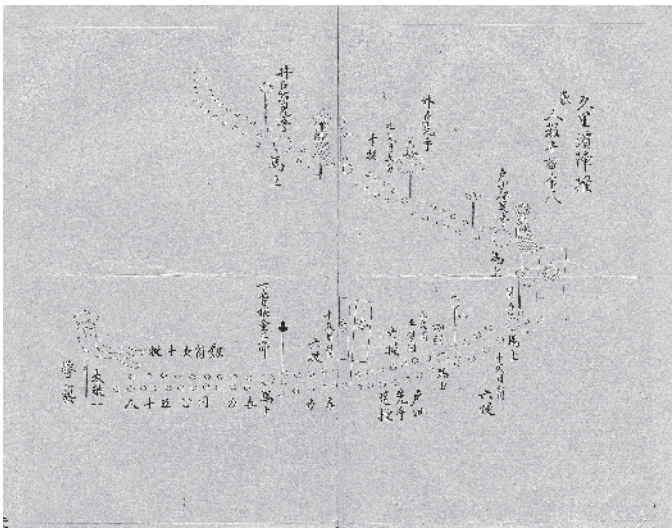
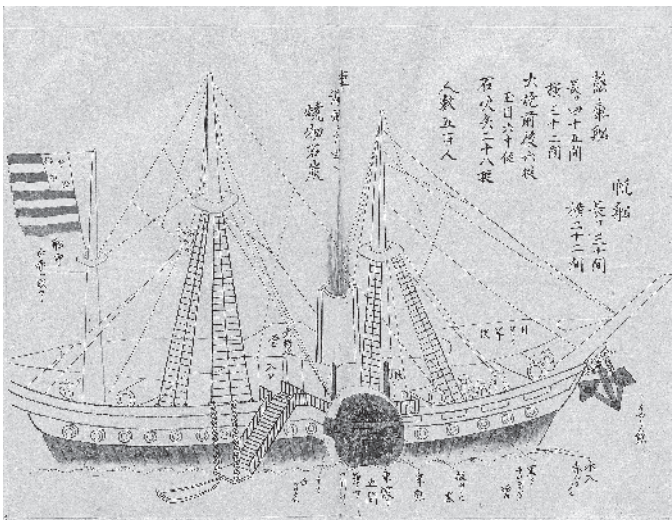


図2① アメリカ人久里浜上陸図(付表3—49—1)



② 久里浜陣図(付表3—49—2)



③ アメリカ蒸気船図(付表3—49—3)

の「御慰」みにと「写取」ったという。元の図は「粗図」であったが、竹腰は「其俣ニ写」したという。文言からは、竹腰自身が写し取ったようにも読めるが、図2(付表3―49)に書かれた文字の筆跡は、竹腰のものとは認め難い。しかしその図は、アメリカ人の行列図、浦賀奉行の備図、蒸気船の図、計三点であり、図2と共通しているのは無視できない。もし図2が、竹腰の書状にある図三点と同じものなら、竹越が何者かに命じて写させた図という可能性も指摘できる。そうであるならば、多くの類本がある図とはいえ、竹腰が関与した可能性を示唆する貴重な図像資料ということになる。

書状には、「ケ様之図所々より入御覧候儀とは奉存候得共」と記載されるように、竹腰は慶勝のもとにさまざまな図像情報が伝達されていることを知っていたようである。そして、「珍敷義」があつたら伝達すると慶勝に伝えているように、江戸にいる竹腰は、慶勝の情報収集活動に不可欠な存在であつたこともわかる。

(二) 江戸湾防備関連図

標題の図については、「諸品新聞書」巻一(付表1)の26・27の海防図摺物、同書巻二(付表2)の25・34の川越藩の相州台場図と、各巻に貼付された品川台場図がある。

付表1―27「柳都海岸略図」が、もともと慶勝の御手許文庫「朱丸星黒印御箱」に収納されていた図で、後に「諸画縮図」に貼付され、さらに「諸品新聞書」に一括されたことは先に述べた通りである。

ここではまず、付表1―26「江ノ島鎌倉道中記」に注目したい(図3・口

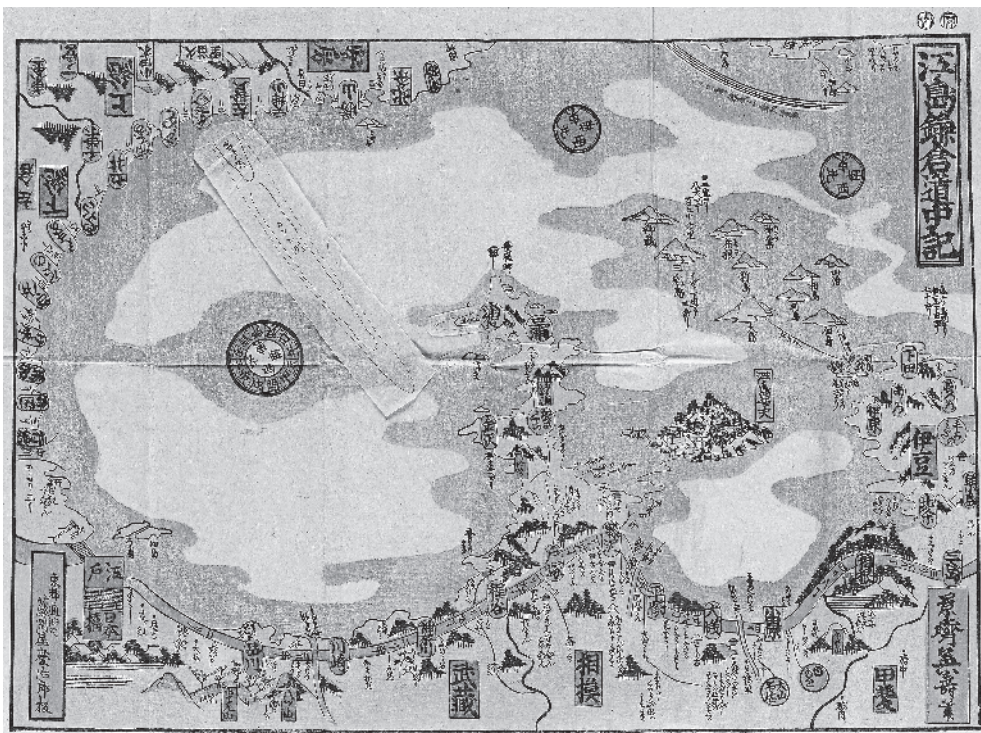


図3 江ノ島鎌倉道中記(付表1―26)
本多越中守一行による江戸湾巡見の探索書に添えられた別紙

絵1)。

この図は、浮世絵師・景斎英寿(生没年不詳)による錦絵で、板元は有名な通油町(東京都中央区日本橋大伝馬町)の藤岡屋慶次郎(慶治郎)である。錦絵そのものはそれほど珍しいものではなく、広く出回っていたものである。しかし、「富津ノ洲」や「カクレ洲」と記載された掛紙が江戸内海の部分にあり、浦賀周辺にも小さな掛紙が複数あることが、史料的价值を引き上げた。

実は、この図3と関連する文書がある。この文書は、ペリー来航後の六月二日から七月一四日に掛けて実施された若年寄本多忠徳(海防掛)一行による武蔵・相模・安房・上総沿岸巡視の様子を实見した探索書である。「探索之趣申上候書付」という標題を持つもので、慶勝に上呈されたものである。やや長文であるが、「諸品新聞書」に貼付された絵図にも関わるので、全文を引用しよう。

先般異国船四艘江戸近海江乗込候儀に付、以来内海江者乗込方出来不致様、猿嶋并富津之洲辺埋立等有之風聞に付、探索之趣左ニ申上候

一、先般渡来仕候異国船之儀、別紙絵図面之通内海之方心忖ニ乗廻し、測量等も仕候付、打払にも可相成之処、左候而ハ以後何様之異変出来可仕も難計候付、いつれニも浦賀湊辺ハ江戸海之方江者乗込方出来不仕様ニ兩岸より築立等出来、海路狭く相成候得ハ、万々一争戦等之節矢玉も相届可申候得とも、是迄之通ニ而ハ兩岸間広候間、逆も十分ニ行届兼候由、右ニ付浦々御台場之様子并築立地等有之含ニ而、今度本多越中守初見分相越候趣ニ而、見分之節ハ浅深等能心得罷在候水主等相撰乗廻し有之、去ル(七月)五日迄ニ猿嶋・観音崎・

富津之洲之辺見分相済候処、いつれも可也築立等も出来可仕哉ニ付、猿嶋江ハ大津又ハ田戸式ヶ所之内分段々々々築立陸続ニ仕、下総国よりハ富津隠れ洲まで之処、凡巾式拾間長式里程築広ヶ相成候哉之趣風聞有之、尤実否ハ不相分候得共、右等之訳ニも候哉、公辺見分御役人之内、安房ハ浦賀江渡り、或ハ金澤野嶋辺江渡海いたし、又ハ本牧より乗出し上総江与申如く、度々往返有之候、勿論いまた房総之方見分済与申ニハ無之処、右之通船之往返繁く、其内ニハ右ニ不拘三崎之方江分れ行候者も有之与申様ニ而、何等之訳ハ不相分候得共、多分ハ右御築立一条ニ付、種々御取調御用与申事ニ相聞候

一、猿嶋江築立続之儀、段々御取調ニ相成候処、猿嶋ハ往古田戸之地内ニ而、陸続之処、いつ之比よりか切所ニ相成、夫ハ段々と双方懸ヶ込、当時ハ海上式十町程隔居候由ニ御座候

猿嶋之儀、漁師等ハ魚之去ル与申忌言葉より、十嶋与申ならし居候由、十嶋与申訳ハ右猿嶋之海岸ハいつれも巖岩ニ而、其内十ヶ所ハ汐都合ニ而小嶋之如く海面江顕れ出候間、十嶋の号有之由ニ御座候

一、右之通ニ付、田戸之出鼻カチリキと申所より築立候得ハ都合宜敷、且ハ大海ハ差込候汐もさからひ不申候間、築立易く可有之歟之処、左候而ハ大津濱川越家本陣屋よりハ矢張大廻ニ而、其上大砲備候ニ都合不宜候間、大津浦より築続ニ相成候方可然哉与決し兼居候とも申事ニ候

一、観音崎ハ、内海ニ而浦賀辺之壱番出崎之処、此崎続多分岩石之遠浅ニ付、是も余程築添ニ相成とも申風聞ニ候

一、下総国富津之洲之儀ハ、富津村地方より凡半道程ハ平常ニ相見居、

夫今壹里余者隠れ洲ニ相成居候得共、隠れ洲之内六ヶ所程ハ汐之加減ニ而顕れ候程ニ付、右不浅築立ニ相成、南面江ハ台場出来大砲御備ニ相成候御調与歟相聞申候、付而ハ別紙^②絵図面懸ケ紙朱点之通相成候得者、此築立之出鼻与、猿嶋統築立鼻与ハ其間漸一里程ニ相成候由ニ御座候

一、右築地ニ付候儀ニも可有之哉、越中守初ハいまた房総巡見最中ニ候得共、御普請方之内壹人比日俄ニ安房・上総分浦賀江戻り、右御普請積立等取調ニ懸り居候由ニ御座候

但、内々取調ニ懸り候処、三ヶ所ニ而ハ長延六七里之場所ニ而、海之浅深有之候得共、富津より猿嶋辺ニ而者六七十尋も有之、広大之御普請、殊ニ眼ニ見候場所とも違ひ候間、大凡之御入用等未見積候者も無之由ニ御座候

一、本文之一条ニ属候哉、彼地近辺石之姓合等も内々役筋を尋ニ相成候由

一、築立方色々工夫も有之候処、緩々取計候ハ、宜勤考も可有之歟ニ候得共、何分差急候御用ニ而其上末代不朽ニ出来不致候半而ハ難相成候付、宜工夫も無御座、其内右近海ニハ舟数多有之事ニ付、古き船御買上ニ相成、右古船江石積込、何艘与なく沈め候ハ、根留リニ可相成候間、根留さへ出来之上ハ子細も無之与申族も有之、又ハ最初拾石等段々ニ取計候ハ、宜かるへきとも申、米俵を以築立不申ハ成就致間敷杯と内々ニ申向も有之由、何分一ト通り之御普請与ハ訳違ひ、当惑と歟申事ニ有之候

一、右之通ニハ御座候得共、何分見分も相済不申事ニ付、篤与見分之上何様ニ可相成哉も難計候得共、築立之御評議ニ決着仕候得ハ、時

日を不移御普請取懸り相成候由ニ御座候

右之趣奉申上候、以上

七月

この探索書は、嘉永六年七月半ばに作成されたものと思われるが、作成者は不明である。この探索書が、本多の江戸湾沿岸巡見のものであることは、「浦々御台場之様子并築立地等有之含ニ而、今度本多越中守初見分相越候」とあることから明らかで、内容も巡見の行程と矛盾しない。探索書にあるように、当初は猿嶋や観音崎、富津の洲を埋め立て、台場を築造しようとしていた様子がうかがわれる。^{②⑩} 帰府後、本多に随行した川路聖謨と江川英龍によつて提出された「富津埋立御台場御取建之儀に付御書付之趣御答申上候書付」にも、「異船防禦に付、富津之出洲へ向け、旗山十石崎先より海中へ新築御台場雁行に飛々御取建有之候得ば、永世之御備に罷成、先づは御安心之事に候」と指摘されている。^⑪

以上の内容から、図3は探索書で述べられている②「別紙絵図面」に相当するものと認められる。これには「懸ケ紙朱点」があるというが、図3とまさに同じである。掛紙の朱点は、埋立を想定しているものと思われる、それぞれ「富津ノ洲」「カクレ洲」「観音寄」「大つ」「猿しま」の周辺を掛紙に書かれた朱点で示している。「観音寄」「大つ」「猿しま」の部分は伝わりにくいと思ったのか、探索者は図3の裏面に別紙を貼り付け、「本文絵図面ニ而ハ猿嶋等之にらみ合不宜候間、大凡之処左ニ取調申上候、朱星ハ今度御築立ニ可相成哉之分ニ有之候」と付記し、該当部分の拡大図(図4・口絵2)を示した。図4には、探索書にある「カチリキ」「田戸」「大津」などの地名も書き込まれ、よりわかりやすくなっている。

さらに、探索書には他にも別紙が添えられていた。①「別紙絵図面」で

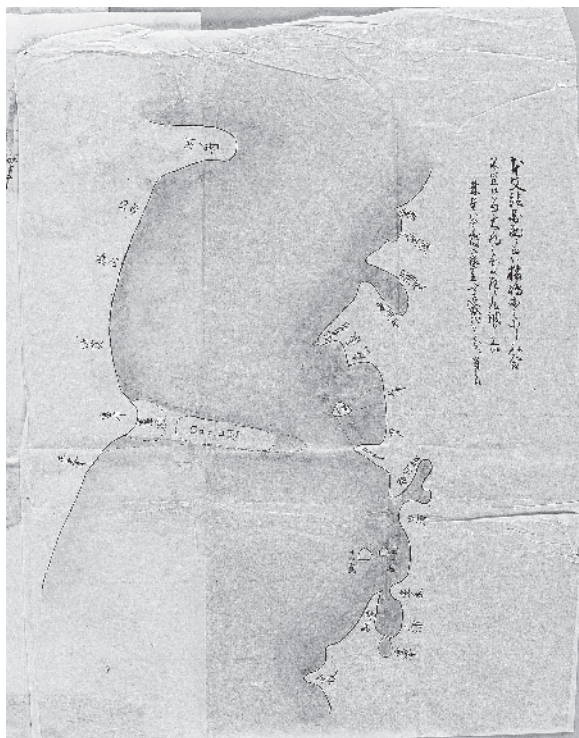


図4 江ノ島鎌倉道中記の裏面に貼り付けられた別紙
(付表1—26)

ある。①は、先般渡来したペリー艦隊が、江戸内海を乗り回し、測量していたことを示す図であるという。

これに関しては、該当すると思われる絵図を「諸品新聞書」から二点見出すことができる。一つは巻二の冒頭にある「異国船近海江卸船并右辺乗廻等之絵図面」(付表2—1、図5)である。彩色絵図で四隻の艦隊の移動を艦隊ごとに詳細に示したものである。もう一つは、同じく巻二に貼付された「相房海岸略図」(付表2—33、図6)で、これも四隻の艦隊の移動を示しているが、図5にくらべ簡潔である。艦隊ごとの移動の区別もない。ただ、図6には富津の「カクレ洲」と思われる図も画かれ、探索書の内容とも矛盾しないので、図6を①「別紙絵図面」と推測したい。



図5 異国船近海江卸船并右辺乗廻等之絵図面(付表2—1)



図6 相防海岸略図(付表2—33)

本多越中守一行による江戸湾巡見の探索書に添えられた別紙か

そして、川越藩の相州台場図を画いた付表2—25「松平誠丸領分 走水之図」と、34「松平誠丸持場 猿嶋之図」も探索書と関連した絵図ではなかったか。この地は、天保一四年(一八四三)以降、川越藩の持ち場で、「走水之図」には、旗山台場・十石崎台場の様子が画かれ、「猿嶋之図」も沿岸巡見で話題に出て来た地名である。これらの絵図の題簽の筆跡が、探索書や図3・4・6に記載された文字の筆と同一と認められることも、その可能性を高めているのである。

ところで、慶勝自身は、探索書で示された内海埋立による警備をどのようにに評価していたのであろうか。それは、嘉永六年七月二三日付で水戸前藩主の徳川斉昭宛に出した書状で明らかである。この書状で慶勝は、埋立費用が莫大であることを懸念し、「日本者沿海之国地ニ付、一二所堅固ニ防禦出来候而も惣海岸何方も同様ニハ相成間鋪」という発想から、台場築造による海防にもともと反対であった。しかも、新規築造は出費も嵩む。同じ出費をするのであれば、むしろ軍艦製造による防衛体制に期待を掛けていたのである。アメリカ国書に対する幕府の諮問に応えた上書別紙においても、「是迄之和船を以、彼か海上之自在縦横を禁して恐を抱しむる事ハ難叶、自然守禦一方」となるので、「大船御取立之儀を希望致候事」と、異国に武威を示す象徴として大艦の建造を提唱していった。⁽²³⁾したがって、「諸品新聞書」に貼付された多くの軍艦図は、慶勝の特別な思いが込められた絵図と位置づけられそうである。巨大なアメリカ蒸気船・帆船図を多く収集しているのも、故なしとしない。

慶勝が懸念した通り、川路や江川らによって提示された富津埋立による台場築造計画は、総工費が莫大であったことから実現を見ず、品川の海中に一一カ所の台場を築造することに決定した(ただし完成したのは第一〜第

三、第五、第六、御殿山下台場の六カ所のみ。

この品川台場に関する絵図も、慶勝は仕入れている。「諸品新聞書」には、巻一に一点(付表1―8)、巻二に二点(付表2―26・53)、巻三に一点(付表3―46)が貼付されている。そのうち巻三の図は慶勝自身によるもので、何らかの絵図を元に写し取ったものであるが、上述した通り、慶勝は新規に品川台場を築造することにも批判的であった。

慶勝の「日記」嘉永七年閏七月一三日条には、付家老竹腰正富らが品川台場を見分した記事があるが、「御台場不評判之事」⁽²⁴⁾であったという。前掲註(11)の「日記」によれば、同年一〇月二四日に、慶勝自身が品川台場のうち第一から第三を実見しているが、感想の記載はない。付表2―26・53は、それぞれ品川台場の「一二番之礮台」「三番砲台」であるが、これらの見分と関連したものなのかどうかは不明である。

(三) 再来航関連図

嘉永七年(一八五四)正月一六日以降のペリー再来航に関する図像は、「諸品新聞書」巻二を中心に多くを見出すことができる。しかし、第一回来航時のように文献史料と突き合わせができる図像は少なく、位置づけが難しいものが多い。

再来航時の文献史料といえば、尾張家にも「内密書」⁽²⁵⁾という探索書が伝来している(作成者不明)。この文書は、嘉永七年正月から四月までの浦賀・横浜・江戸情報を記載しており、慶勝に逐一伝達していた風聞書を「内密書」として一書にまとめたものである⁽²⁶⁾。ただし、探索者も記しているように、「辻風聞」のみで、事実かどうかを直接調べ上げて送ったものではない。

く、「虚説」入り交じった「風聞」という。実際、文書中には「〇〇候由」「〇〇候哉」といった伝聞表現が散見される。

実は、この「内密書」にも「別紙図面」が添付されていたものがあつた。例えば、「内密書」には、「異船滞船中、異人儀ハツテイラを卸シ、所々海岸測量致、歩行候由ニ而、武州金沢辺江者別紙図面之通上陸もいたし」(正月二日頃)であるとか、「応接之儀ハ(中略)普請向取兼候由ニ候得共、暫場広ニも有之候付、凡日数四五日程之内ニ別紙図面之通横浜村へ皆出来相成」(二月六日頃)、「右酒宴中ニも候哉、座興之為別紙画図之如き黒人罷出歌舞音楽を成」(二月二九日頃)、「右異船外廻り之儀者、凡之図取を以別紙ニ奉申上候」(前同)、などといった記載がある。

しかし、これらの「別紙図面」などを「諸品新聞書」のなかから特定することは難しい。ただ、「内密書」の記事は、「諸品新聞書」に貼付された絵図の背景を説明するうえで活用できるものもある。以下、「内密書」の内容を適宜参照しながら、「諸品新聞書」に貼り付けられたペリー再来航関連図を取り上げていきたい。

まず人物図である。これはあまり多くはないが、提督ペリー(付表2―31)や副官アダムズ(付表2―69)の肖像画がある。いずれも多方面に回つた瓦版から筆写したものと思われる墨画である。そのうちペリー肖像画は、鷹見泉石関係資料「彼理横浜入津図」のものと同服装・ポーズが似ている⁽²⁷⁾。アダムズのはうは、「身長六尺五寸歟、七尺位ニ相見へ候由」と註記があり、面貌は松平慶永「合同舶入相秘記」に挟み込まれた図と酷似している⁽²⁸⁾。この図は、「泊山城、今朝罷出候節相咄候は、先日之応接有之候節、浦賀与力之者アハタムス真像を写し候由、右絵図入披見」⁽²⁹⁾とあり、松平慶永に差し出されたものとわかる。図の相似性から、慶勝と慶永との間でお互



図7 ビッチンガー肖像(付表1—14)

いにやり取りがあつたのかどうか。

また、サスケハナ号乗組員(従軍牧師)であつたビッチンガーの肖像(付表1—14)は、あまり知られていないように思われるので掲示した(図7)。比較対象の図像を見出せないので評価が難しいが、作成者が直接見たわけではなく、当時流布したアメリカ軍人図像をビッチンガーと見立て、彩色図に仕立てあげたものかもしれない。作成者と思われる印もあるが、不明である。「亜墨利加人寅二月十六日神奈川ヨリ上陸 ビッチンセール寅三十歳像」と墨書されている。この「ビッチンセール」ことビッチンガーが、歴史上名を残したのは、嘉永七年二月一六日に神奈川宿に上陸し、川崎大

師河原方面まで、東海道を徘徊した事件があつたためである。前記した「内密書」では、この事件を以下のように伝えている。⁽³⁰⁾

一、去ル二月十六日頃之由、横浜村江上陸献上物手入等いたし候趣ニ而、凡異人五拾人程罷越候哉之処、同日之儀者到而天氣能有之旁にも候哉、同所之内所々見物等いたし、歩行候由之処、右之内屯人頭立候分之由、名ハビッチンゼエル与歟申者ニ而、年齢三十才程ニ罷成候異人、横浜村の陸地通り武州久良岐郡芒村洲先浦辺江相越候由之処、折節同所海苔取船同所百姓次右衛門召仕兩人程罷出居候を見かけ、神奈川辺江之方角を指、渡し呉候様手真似杯いたし候由之処、兩人儀者肝を潰シ、返答ニも困り居候哉之処、折柄浦賀同心兩人程駆着、不苦候付神奈川宿迄通船可致旨申談候哉ニ付、右異人并同心式人を乗七神奈川宿海岸宮ノ河岸与申浜手迄乗セ送り候由之処、異人儀神奈川宿内江上陸、先立罷越候哉ニ付、無余儀浦賀同心附添相越候内、人家杯江も猥ニ罷越候由ニ而、附添之者も持手余シ、同宿内台下方下り方新宿松原取付迄一円戸メ為致、婦人之通路を止メ候由、然内浦賀与力応接懸り等も追々ニ出役いたし、西町辺往還繩張、或ハ葭簀等を以立切止メ候由之処、不聞入利不尽ニ繩張をくゝり、葭簀を押分ケ等いたし、同宿所々寺院江立寄、武州子安村辺山手之方江登り、同州寺尾村裏通り野道江懸り、鶴見村橋際今本海道筋六郷川渡船場迄罷越、船相尋候由之処、其以前兼而便船為取隠置候哉ニ付、壹艘も不相見、尤附添之者渡船場ニ而者無之由申聞候哉ニ付、無抛平間村辺江立廻り、羽田江之渡船立而相望ミ候哉之処、前頭同様船取隠有之、此所者渡船場ニ而ハ無之趣小役人之内分猶申論候哉之処、立腹いたし候躰ニ而、彼是事六ヶ敷申聞、附添之者共甚

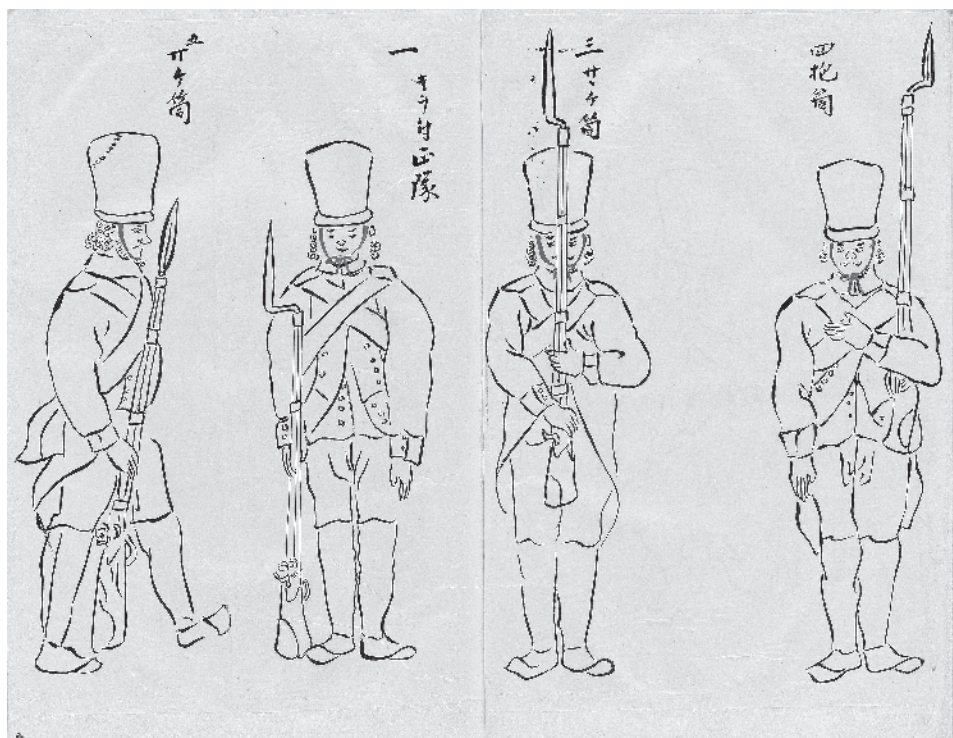


図8 士官抱え筒・捧げ筒正面図(徳川慶勝筆・付表3—37)
アメリカ軍人の訓練図か

(困り) 込り種々相宥メ、漸夜ニ入同所海岸附村々徘徊為致、同五時過頃生
麦村浜手ハ漁船相雇ひ乗セ、本船江送り届相成候由ニ而、翌日ニも
候哉、浦賀与力を以右之趣使節之方江申遣候哉之処、心得違之旨相
託、当人儀者急度札可申付旨等及返答ニ候由

この事件は、幕府への贈呈品組み立てのために横浜に上陸したピッチン
ガーが引き起こしたもので、浦賀奉行所役人の嚴重な抗議により、ペリー
の命令で引き戻された。日本側役人は、サスケハナ号艦長ブキャナンの内
命を帯びて、江戸を目指した地理探査の行動と推測したという。⁽³¹⁾「内密書」
では、ここでは引用しなかったが、事件の背景にブキャナンと副官アダム
ズとの不和があったという「雑説」も紹介している。

また、特定の人物ではないが、人物を描いたものとして注目できるの
は、巻三(付表3)の37の一連の士官図である(図8)。文字は慶勝の筆であ
ることは確実で、画いたのも慶勝ではないかと推測できる。結論を示す
と、この図は、横浜で実施された、アメリカ軍人による訓練の部分図であ
る可能性を、視野に入れても良いのではないかと思えることである。アメ
リカ軍人による訓練は、日米の会談日である嘉永七年二月一〇日、一九日、
二六日などに実施されていた。⁽³²⁾もっとも、こうした軍人図についても、何
らかの原図があったと思われるが、今のところ何をもとにこの図を画いた
のか不明であるので、問題提起に止めたい。

訓練図といえば、巻一(付表1)の1・31などもある。これらがアメリカ
軍隊の訓練図と関わるのか、あるいは同時期に尾張藩内で実施された西洋
銃陣の訓練図なのか、現状では特定できないが、訓練への慶勝の関心度の
高さを示すものとして指摘しておきたい。

ついで、アメリカからの贈呈品図を見てみよう。慶勝は、異国と贈答品

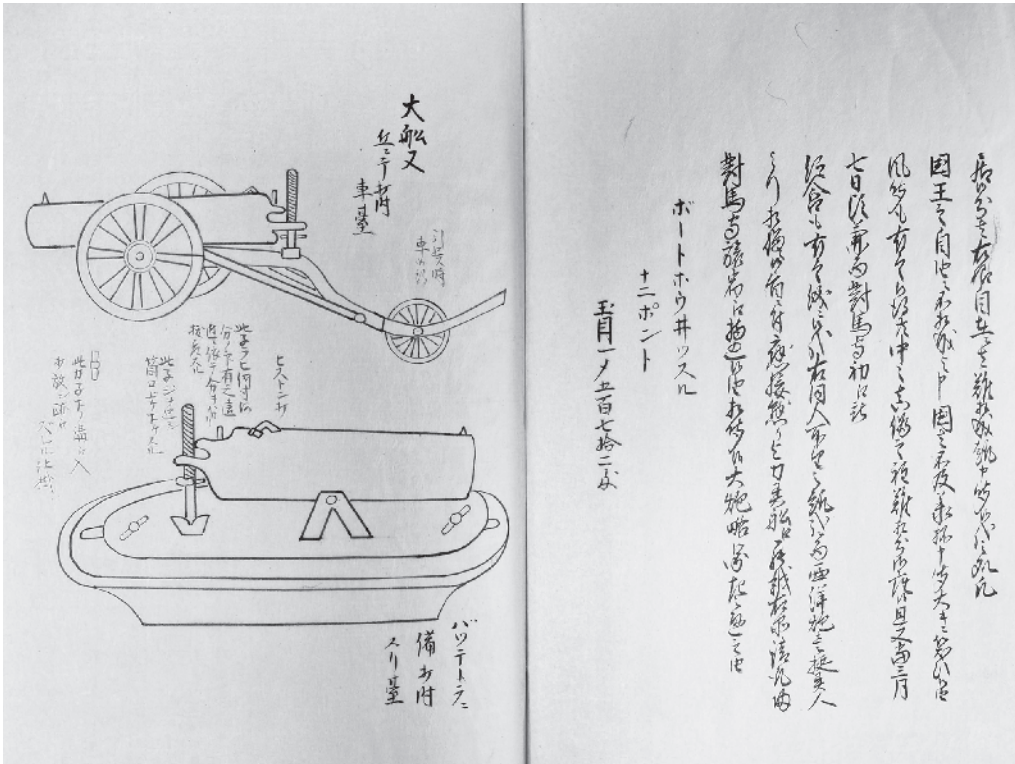


図9 「内密書」に記載されたボート砲図

のやり取りをすることには嫌悪感を示しているが、⁽³³⁾「諸品新聞書」に貼り付けられた贈呈品の点数は、決して少なくないので、こうした感情とは次元を異にして、西洋の軍事技術や機械に関心を寄せていたことは歴然としている。巻二(付表2)だけでも、5・6・11・21・22・37・38・54・56・57・58・65と関係図を抽出できる。特に、5・22・38のボート・ホイッスル砲(ボート砲)は、「内密書」にも記載されており(図9)、慶勝は各方面からこの情報を得ていたことになる。このボート砲は、上陸用ボート(バッテリー)に搭載される軽砲で、砲座を旋回させながら砲撃することも可能な西洋式最新砲であった。巨大な蒸気船が江戸内海の奥深くに入り込めないのに対し、ボートは海岸に乗り付けることができ、さらに舳先の砲座からホイッスルを外し、二輪掛けの砲車に設置されると、野戦砲へと変身できる水陸両用の優れものでもあった。⁽³⁴⁾三月九日、ペリーから幕府へとボート・ホイッスル一門と砲車二両が贈呈されている。⁽³⁵⁾

なお、後述の尾張藩の軍事とも関わるが、尾張藩では、御船奉行の千賀氏が、ペリーのボート砲以前に、知多半島で船上からの大砲訓練を実施している。「嘉永四亥⁽³⁶⁾辛亥八月十六日、(中略)千賀志摩手器大筒三貫目、平太船三角材を並置、其上砲台盤を置、仕懸を以、横二大筒を置いて放つ⁽³⁶⁾」とある如くである。そうであるならば、ボート・ホイッスル砲の図は、格好の比較対象となつたであろう。慶勝の「世統一世紀⁽³⁷⁾」でも、「軍用船、サカ艀舟、大砲仕懸ノ孤舟出来致候」と記載されている。

(四) 尾張藩軍事関連図

「諸品新聞書」には、ペリー来航そのものではないが、全く無関係とは

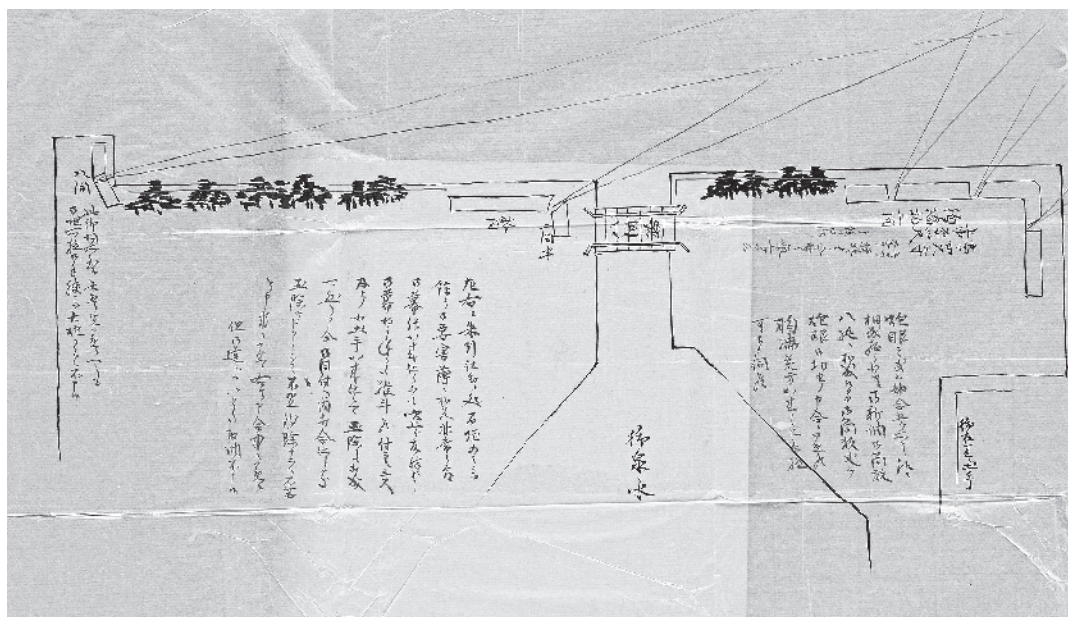


図10 木挽町築地藏屋敷砲台配置図(竹腰正富筆・付表2—13)

いえない嘉永・安政期の尾張藩軍事関連図が貼付されているので、いくつか紹介しよう。

例えば、巻一（付表Ⅰ）の3・5の「暁長持船」は、慶勝の筆で「新造千賀与八良工」と記載されていることから、御船奉行千賀与八郎に提示された図案か模本かと考えられる。前後の「オクダンド（オクタント）」（付表1・2・4）やコンパス（同5・7）、「象眼規」（同5・8）などは、航海具として関連がある。前記の如く、千賀氏は慶勝の指導のもと、知多半島を中心とした海防政策を推進していた。⁽³⁸⁾例えば、慶勝の「日記」⁽³⁹⁾「安政二年（一八五五）九月二八日条には、「熱田沖にて武術、千賀与八郎船、打一覧、午後（中略）軍船一覧」とあったり、安政三年「日記」では、「与八郎より伺、知多郡炮台江付、せん拔廻し置」〔三月一六日条〕、「四十挺早打之義筒出来并車台五挺之義、与八郎被談候事」〔三月一九日条〕、「与八郎江三文メ筒四十挺、車台六車之義申談置」〔三月二二日条〕、「与八郎より伺、大砲破裂」〔四月八日〕などと記載されており、尾張藩の海防政策に千賀与八郎がいかに重要な存在であったかがわかる。

続いて、大砲関連では、巻一(付表1)の9「尾張製造五貫目大砲・車台
図」と、巻二(付表2)の13「木挽町築地藏屋敷胸牆設置図」を見出せる。
このうち付表2—13に注目しよう(図10・口絵3)。

木挽町の築地蔵屋敷は、明暦三年（一六五七）に幕府から拝領した屋敷である。⁽⁴⁰⁾坪数二万七二五八坪のうちに、藩の御蔵五棟とともに成瀬・竹腰の両家御年寄（付家老）の米蔵もあり、蔵屋敷に詰める水主もいた。風光明媚な汐入泉水庭園を備えていたが、江戸湾に面していたこの屋敷は、ペリー来航後に軍事要塞としての機能を付与されることとなる。すなわち、藩は砲術師家辻弥平・仲父子らに命じ、この屋敷に砲台を築造し、併せて新調

した西洋砲八挺を設置することを計画したのである。⁽⁴¹⁾ 図10は、その裏付けともなるべき図で、海岸の砲台配置図が示され、朱筆で説明書きがある。

⁽⁴²⁾ 砲眼之義ハ、都合五ヶ所之趣ニ相成居候得共、御新調御筒数八挺ニ相成候間、御筒数丈ヶ砲眼御切セノ申合ニ御座候、胸墻荒方出来之上、取極可奉伺候

⁽⁴³⁾ 左右ニ朱引仕置候処、石垣のミニ而余り御要害薄ニ相見、非常之節御幕張出来仕候而も吹上ヶ故、殊ニより御幕付かね候も難計候、付而者三尺及ヒノ小土手出来仕候ハ、玉除に相成可然と申合、御目付へ内打合仕候処、玉除ケト申候而者不宜、汐除ナラハ不苦与申事ニ御座候、

右者申合中ニ御座候、但、御達シハいまた取調不申候

⁽⁴⁴⁾ 此御場所、至而矢懸り宜御座候へとも、御地所極御手狭ニ而大砲か、り不申候

右部分から見よう。新調した大砲数は八挺であるが、砲門が都合五ヶ所しかないところを問題視し、大砲数に合わせて砲門を切る予定であることを示唆している。中央部分の「左右ニ朱引仕置候処」とは、八間橋の左右にある林の部分のことである。ここは石垣のみしかなく無防備であるとのこと、土手を築造すれば玉除けになると想定する。しかし、幕府目付に問い合わせたところ、玉除けではなく、汐除けを理由とするよう打診され、申合わせ中とのことである。左部分は、場所が狭いため大砲が設置しにくいことを問題にした。

このように、さまざまな模索が試みられているが、注目すべきは、この朱筆は、当時江戸にいた付家老竹腰正富が記したものであったことである。筆跡から判断して間違いない。築地屋敷に砲台を設置するのは、幕府の許可が必要であつたことにも依り、そのため幕府と藩の調停役である付

家老が関わっていたのであろうが、竹腰自身が西洋砲術導入に理解を示していた点⁽⁴²⁾は、看過できないことである。

また、慶勝自身も築地屋敷の軍事整備に関して、徳川斉昭に問い合わせをしていた文書がある。⁽⁴³⁾ 以下に引用するのは、慶勝の問いに対する斉昭の回答（嘉永六年七月頃）である。

⁽⁴⁴⁾ 浜御殿脇御屋敷ハ、何レの道ニも汐入御泉水ハ邪魔ニ相成候様ミえ申候、たとへは汐入ハ浜御殿の方杯ニ被成、八間之処ハ御埋、御泉水杯も浜手の方御埋ニて、かけ走り等よろしく相成候てハ如何可有之哉、何レニも御泉水ニて場狭の様、御図面ニてハ拝見いたし候

ここで斉昭は、汐入泉水の欠陥を指摘し、特に八間橋の部分が狭いため非常事態に即応しにくいことをあげて、この周辺の埋め立てを提起した。実際に尾張藩で埋め立て工事が行われたのかどうかはわからないが、江戸湾に面した尾張藩屋敷の最前線では、異国船対策の軍事整備が進行していったのである。

そして、慶勝自身も砲台築造について調査を怠ってはいなかった。「諸品新聞書」巻三（付表3―52）には、砲台について「海岸に台場ヲ築ハ、余リ高大にスルハ無益ノコト也、敵船ヨリ放火スル防ク程ニ築テ足ルヘシト謂也、西洋人ノ画シバツレーエンノ図如左」と記し、図を画いて自らの備忘とするのであった（図11）。幕府の台場築造に批判的であつたのも、こうした研究成果をふまえた上でのことであつたのである。

このように、尾張藩では、砲術などの軍事面で西洋化が試みられていった。しかし、これが全藩的規模で導入・活用されていったと考えるのは早計にすぎよう。そもそも、慶勝の支持基盤である御馬廻組・大番組の軍団は、国学者と結びつく尊王攘夷論者で、彼らは洋学を徹底的に排除する方

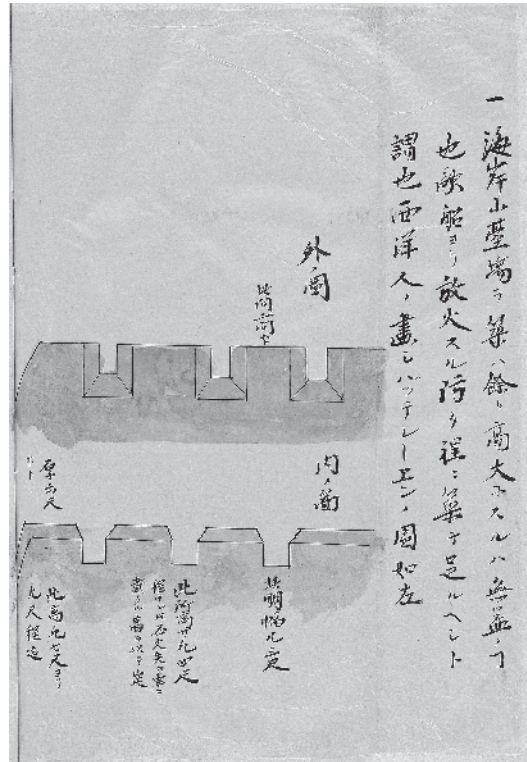


図11 砲台図(徳川慶勝筆・付表3—52)

針を貫いていた。⁽⁴⁾慶勝自身は、「西洋流廢絶之義ニ而者、善惡とも不用詠ニハ決而無之、有益之義ハ勿論相用ひ、無益之義ハ取捨可申候段ハ兼而申置候事⁽⁴⁵⁾」とある如く、水戸斉昭と同様、西洋の有益面を導入すべきとするフランス感覚を示していた。しかし、その支持グループは、必ずしも慶勝と思いを共有していたわけではなかった。兵法は長沼流、砲術は稲富流と、伝統的な軍制を志向するなど、尾張藩では旧秩序が濃厚に残存しており、改革への反発は根強かった。

したがって、慶勝による西洋砲の調査・研究成果が、全藩的規模で十分に活用されたかどうかは、慎重な検討を要するのである。

「諸品新聞書」巻三(付表3)の51・52は、慶勝自身による西洋砲の研究備忘録であり、特に52は自身がまとめた一紙をそれぞれ帖に貼付したものである。西洋砲の種類や砲弾の仕組みなどを図示したもので(図12)、御手

徳川慶勝「諸品新聞書」に関する一考察

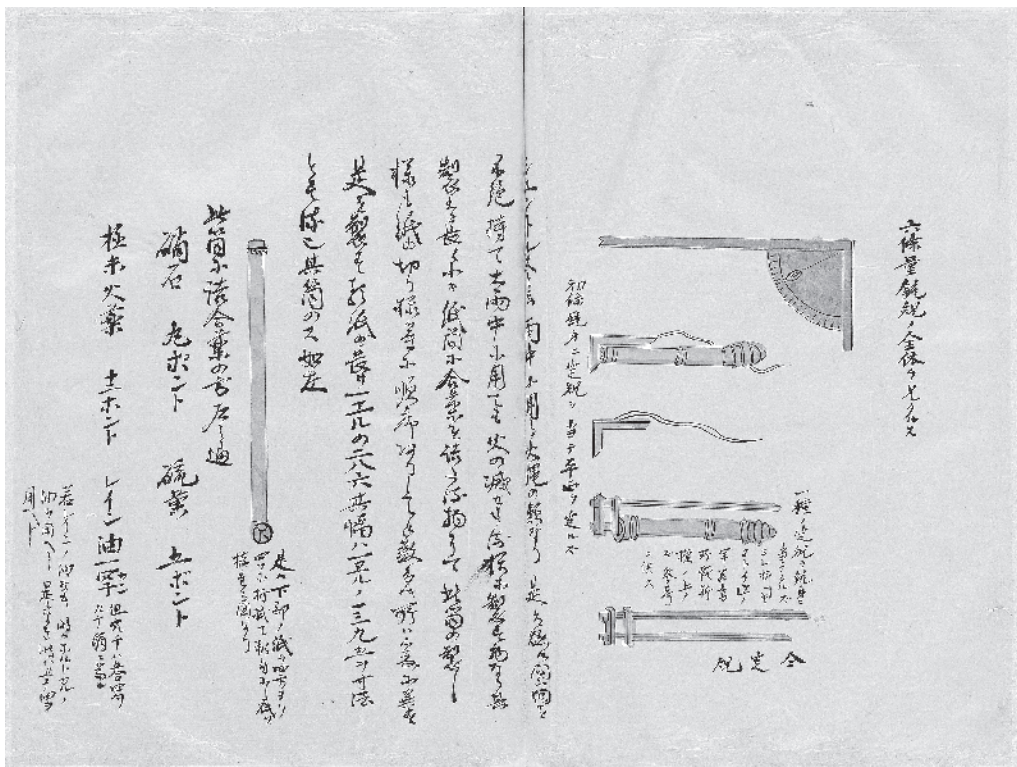


図12 西洋砲研究備忘録(部分・徳川慶勝筆・付表3—52)

許文庫にある高野長英「礮家必読」(嘉永元年)、上田仲敏・柳川春三「西洋砲術便覧」(嘉永六年)などを適宜参照したのであるが、自らまとめているところに慶勝の真骨頂がある。しかし、伝統的な軍制が機能している藩の現状においては、藩での実用は一部に止まった可能性もある。その意味で、藩で活用する以上に、慶勝はあくまで個人的に西洋科学技術のありように関心を示し、御小納戸らの側近と研究していた側面も否定できないのである。

前節とも関わるが、巻二(付表2)の54の農具は、ペリーの贈呈品目を記した「献具農具品目」⁽⁴⁶⁾に見える「磨稼非粉器」のように思われる。贈呈品では、ほかにも蒸気機関車図もいくつか貼付されている(付表2・56・58・65)。これらも藩で運用することよりも、むしろ慶勝個人の嗜好を示す器械であったといえるのではないか。

こうした視点で見ると、「オクダント(航海具)」「付表1-2」、「象眼規」(同1-5)、「迅雷地震天地大變相知道具」(同1-6)、「度不失法(物を煮る道具)」(同1-6)、「見微鏡」(同1-7)、「遍放銃車図」(同1-16)、「地震計」(同1-19)、「晴雨風ヲ前知スル道具」(同1-23)、「大筒少人数ニ而揚ケ候器具」(付表2-16)、「ボイセンデレーケル」(付表3-48)なども、慶勝好みの科学技術であったと評価できよう。

慶勝は、写真術に関心を示し、自ら撮影もした「写真家大名」として知られている。⁽⁴⁷⁾しかし、慶勝の本領が発揮されたのは写真撮影・実験だけではない。西洋砲についても自ら調査・研究をしているので、より広く西洋科学技術全般に大きな関心を寄せていたと見たほうが自然である。写真術は、あくまでもその一部であった。

それは、慶勝御手許の写真帳(アルバム)⁽⁴⁸⁾に、さまざまな西洋器具・機械

の写真が貼付されていることから推察できる。この写真は、洋書辞典類の図版を撮影・裁断したもので、すべて幅一・四cmの金色紙で周囲を縁取りしていることで共通している。この処置は、慶勝自身のこだわりではないかと思われる。アルバムには、コイル式電池、蒸気機関車、顕微鏡、手動式発電機、電信機、モーター、蒸留水精製具、寒暖計、電気式羅針盤等々、西洋科学技術の結晶ともいえる器械六〇点の写真が貼り付けられている。

器具・機械を実見したのが、「諸品新聞書」に貼付されたような(真に迫った図像)から、アルバムに収録された(フォトグラフィ)へと傾斜していく過程も、リアリティを追究しようとする慶勝の姿勢を如実に示す現象として、刻印しておきたい。

三 「諸品新聞書」所収の異国関連図像

慶勝は、西洋諸国などの異国に対して、攘夷論を主張した対外的強硬論者であった。それは、征夷大將軍・徳川宗家の羽翼(「御三家」)であることの自己認識の現れでもあった。⁽⁴⁹⁾しかし、慶勝は異国に対して無知であったわけでは決してない。また、異国情報を完全に排除しようとしていたわけでもなかった。西洋技術の長所を導入・活用しようとする柔軟な姿勢を示し、何よりも自身が興味・関心を示していたことは、前章でも見たとおりである。

本章では、ペリー来航には直接関係しないものの、慶勝が収集・筆写していた異国人、および異国風俗に関わる図像に注目したい。関連図像を多く含んでいるのは、「諸品新聞書」巻三である。



図13 異国人物図(部分・徳川慶勝筆・付表3—29・30)

第一章でも指摘したように、「諸品新聞書」巻三は、本来「海国図絵」という標題を持っていた帖であった。事実、異国人や海外の日用品・船図などが他の巻に較べて圧倒的に多い。

まず、巻三には、四二人の異国人の図像が貼付されており、慶勝の筆で、国名や簡単な説明書きがある。おそらく図像は専門の絵師ではなく、筆の運びを勘案すると、慶勝自ら画いたものと推察できる(図13・口絵4)。もちろん、慶勝の想像図ではなく、参考図像が存在する。人物の服装・ポーズなどから、これら一連の人物図は、天文学者の西川如見(慶安元年〜享保九年が著した図譜『四十二国人物図説』(享保五年)を模したものとわかる。

この図譜は、多くの大名家に伝来し、国内において異国情報を知る重要な手掛かりとなっていた。幕末期においても、それは例外ではなかったようである。ただ、慶勝の「海国図絵」の場合、『人物図説』の順番どおりに画が貼付されているわけではなく、順不同である。しかも、国名と画とを誤って記しているものも、数点見受けられる(付表3—1・14・20)。

付表3—53も慶勝の筆と思われる。これらの図像には、「カヒタン居宅」[長崎市中石橋皆如左]「唐船トモノ方帆柱ハタノズ」^(旗)「唐船帆ノズ」^(旗)「袴フルーク」^(旗)「禪ラントフルト」^(旗)「踏絵」^(旗)「カヒタン居宅玄関前燈籠」などの説明書きがあり、内容から判断すると、長崎を情報源とした絵図と思われる。

同時期の慶勝は、写真研究や実験にも着手しようとしており、その際、側近の御小納戸役人を通じて、長崎から薬品調合法などの情報を入手していた。⁽⁵⁾ 上記のカピタン風俗図なども、御小納戸役人の存在を視野に入れた検討が必要であろう。もとより、前述したベリール来航関連図像や西洋科学技術の知見についてもそうである。

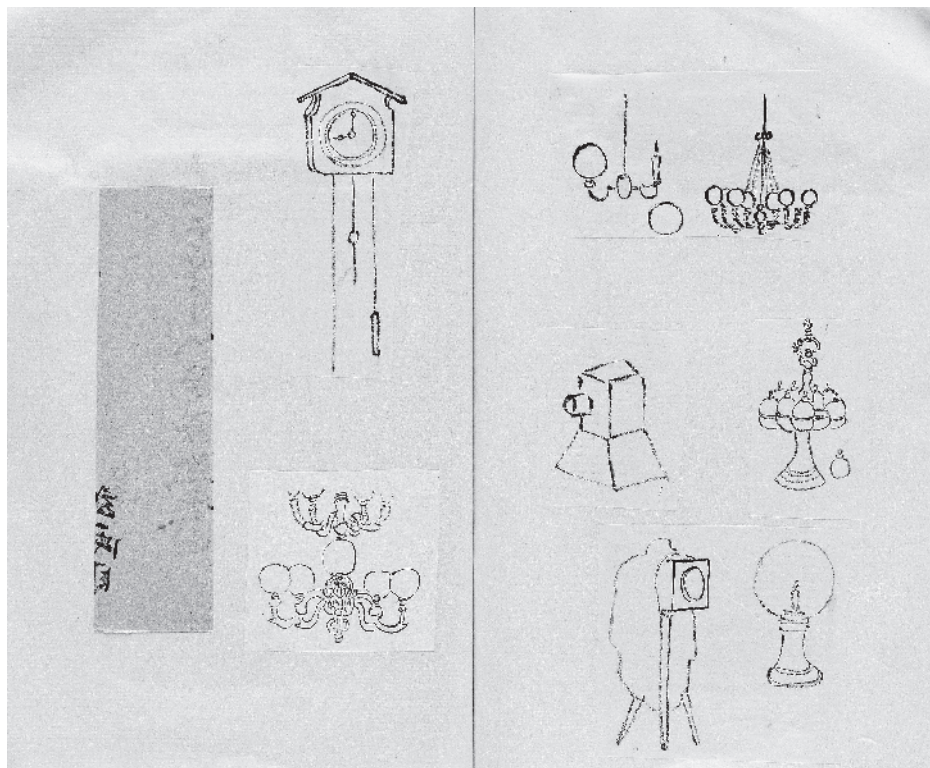


図14 日用品画(徳川慶勝筆・付表1—24)

また、海外日用品に注目した図像としては、付表1—24も無視できない(図14)。シャンデリアやカメラ図、振り子時計などを慶勝自ら筆写している。これについては、慶勝が自身の手廻り道具類(茶道具・茶碗・煙管・香炉・花瓶・鏡・ランプ・置き時計・懐中時計など)を折々に写真撮影し(図15)、アルバムに仕立てていたことと無関係ではないように思われる。⁽⁵²⁾ この措置は、結果的に写真を用いた記録管理の発想に結びつくが、慶勝自身にこうした意識があったのかどうかはわからない(恐らく、なかったように推測する)。

なお、「諸品新聞書」には、蝦夷地・北方関係の絵図も多く貼り付けられている(付表2—20・59—63)。ロシア軍人の図像も見出せる(付表1—10)。慶勝の関心が北方にもあったことは確実で、それは徳川斉昭からの感化も大きかったと思われるが、本稿では全く言及できなかった。これについては別の機会に検討したい。

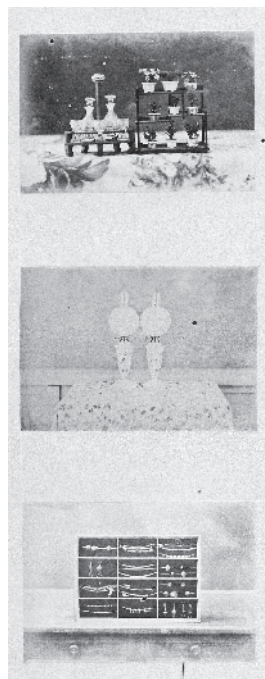


図15 「御道具・屋敷等写真帳」

(部分・徳川慶勝撮影)

上「小型盆栽棚とガラス容器・グラス」
中「ランプ一対」 下「髪飾 箱入」

おわりに

本稿では、徳川慶勝の手に掛かる「諸品新聞書」というスクラップブックを取り上げ、特にペリー来航関連図像や西洋科学・軍事技術に関する図像に注目して、慶勝の情報収集活動を紹介した。その過程で、慶勝の個性についても言及するところがあった。本稿で指摘したことをまとめ、今後の展望を示すと以下の通りとなる。

①まず、「諸品新聞書」の史料性格である。慶勝は、もともと個別に絵図を所持・集積し、御手許文庫に格納していたが、ある段階（安政年間か）で絵画の一部を帖に貼り付け、「諸画縮図」「海国図絵」と命名していた。それがさらに一括されてできたものが、「諸品新聞書」というスクラップブックであった。

②ペリー来航関連図像集としての「諸品新聞書」は、大築磐溪「金海奇観」のように、順序立てて整然と配列されているわけではなく、脈絡なく絵図が貼付されたものである。重複する絵図も少なくない。しかし、当主である慶勝自身が仕立て上げたこと自体に、大きな意義を認めるべきである。なかには自身で画いた図も見出せることから、「阿蘭陀機密風説書」（別段風説書）を自身で筆写したことをもって、情報に対する「慶勝のなみなみならぬ熱意を感じる」と岩下哲典氏が評したことに、筆者も同意できるのである。スクラップブックであるならば、慶勝の手許に集積されながら、貼付されなかった個別図像の存在も想起させる。実際に、徳川林政史研究所では、慶勝の御手許文庫にあり、「諸品新聞書」に貼付されなかった絵図を複数所蔵している。慶勝による取捨選択を経た「諸品新聞書」

は、慶勝の個性・関心が集約されている歴史史料と位置づけられる。

③ペリー来航関係図像では、国内外を問わない巨大な軍船や海防・軍事に関する絵図が多く貼付されているのが特徴的である。広範囲に出回った類本・模写図も少なくないが、「諸品新聞書」の貼付絵図のなかからは、関連する文書が存在するために、独自の価値を付与できるものを複数見出すこともできる。もともと、現状では、どのような経緯で収集したのかわからない絵図も多い。付表2を見るとわかるように、重複する図像を複数入手し、貼付しているのも、何故なのかよくわからない。引き続き調査を進めていきたい。

④慶勝の個性について言及すると、慶勝は、西洋科学・軍事技術に大きな関心を示し、その長所を摂取しようとする姿勢を持つなど、単なる排外主義者ではなかった。西洋科学技術は、手順・方法論さえ誤らなければ、誰もが確実な成果を得られるという側面を有している。この利点は、慶勝の嗜好に合致していたのではなかったか。これは写真術も同様といえる。真を写した画から、フォトグラヒイーへと傾斜していく背景には、より真実・実態に迫ろうとする慶勝の目的意識が介在していたはずである。ただ、慶勝の場合は、写真撮影や実験それ自体への関心も高かった可能性もある。こうしたこだわりを見せる一方で、対象物を分類・整理し、さらに体系化しようとする意識は著しく欠如しているようにも思われ、客観的な評価が難しい面もある。

⑤慶勝は、写真術や軍事面など、西洋科学技術を可能な限り追究しようとする姿勢を示した。それに対して、慶勝を支持する家臣団は、皮肉なことに攘夷・排外主義者が多くを占め、慶勝の嗜好とは相容れない面もあった。慶勝にとっては、写真術および西洋科学技術を調査・研究し、その成

果としてのスクラップブックを一人眺めることが、趣味の世界に没入できる至福の時であったのかもしれない。しかし、これは慶勝個人に限定される問題ではなく、幕末尾張藩全体を貫く問題であったようにも見なせる。結局、尾張藩では、君臣一体となり、連携し合う体制が構築されていなかったのではないか。これに関しては、本稿の課題を大きく越える。別の機会に改めて検討したい。

註

(1) 旧蓬左文庫所蔵史料二六―六四(徳川林政史研究所蔵)。以下、同史料群は「旧蓬左」と略称し番号を記す。また所蔵先を示さない場合は、すべて徳川林政史研究所の所蔵である。

(2) ただし、慶勝の写真研究に関する「写真影鏡秘伝」(旧蓬左二六―二二五)の題簽と内題に「諸品新聞書」と記載されており、関連性が指摘できる。しかし巻数はないため、これが巻四であるかどうかは不明。「写真影鏡秘伝」は、「史料紹介」徳川慶勝写真研究関連史料(徳川林政史研究所「研究紀要」三九号、二〇〇五年)、徳川林政史研究所編「写真集 尾張徳川家の幕末維新」(吉川弘文館、二〇一四年)で全文翻刻されている。

(3) 幕末維新期の政治情報に関する研究としては、宮地正人「幕末の情報収集と風説留」(週刊朝日百科別冊『文献史料をよむ・近世』朝日新聞社、一九八九年)が先駆的研究で、幕府・諸藩の情報収集活動に関しては、岩下哲典「幕末日本の情報活動」(雄山閣出版、二〇〇〇年、二〇〇八年改訂増補版、二〇一八年普及版)がある。他にも、保谷徹編「幕末維新論集10 幕末維新と情報」(吉川弘文館、二〇〇一年)や、岩田みゆき「幕末の対外情報と在地社会」(明治維新史学会編『講座明治維新1』有志舎、二〇一〇年)は、豪農商層も含めた情報収集活動全体の研究史を整理しているの、参考になる。

(4) 博物学に関しては、吉川美穂「殿様は愛すべきナチュラリスト」(NHKプラネット中部編『写真家大名・徳川慶勝の幕末維新』日本放送出版協会、二〇一〇年に所収)で紹介された。同書に「諸品新聞書」巻一貼付の「ミヤマホウシロ(鳥

図)」が写真掲載されている。この図には、慶勝の筆で「安政三年丙辰五月五日、鳥屋持参十五トイウ、直ニ返ス、珍禽ニ付横井氏江写申付ル」とある(この図については後述する)。また、風刺画については、吉川美穂「尾張家十四代慶勝が購入した浮世絵―名古屋市蓬左文庫蔵『内密御買上物留』を中心に―」(『金鯢叢書』三四輯、二〇〇八年)において、「諸品新聞書」巻一に所収される元治元年(二八六四)の風刺画などが取り上げられた。

(5) 岩下哲典「尾張藩主徳川慶勝自筆写本『阿蘭陀機密風説書』の研究」(『金鯢叢書』一四輯、一九八七年。のち前掲註(3)岩下著書に所収)。近年の岩下氏の研究に、「徳川慶勝筆写の嘉永四・五年別段風説書と黒田斉溥の嘉永五年対外建白書―別段風説書と雄藩大名の海外情報認識再考」(『風説書研究会編』オランダ別段風説書集成)吉川弘文館、二〇一九年所収)もある。

(6) 嶋村元宏「ペリー来航に関わる情報収集活動とその伝播について―画像資料を中心に―」(『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』四一号、二〇一四年)。

(7) 「金海奇観」は早稲田大学図書館(学術情報センター)所蔵。その忠実な複製版「原装影印版 金海奇観」が、二〇一四年に雄松堂書店から刊行された。岩下哲典氏は、「金海奇観」を「一九世紀の日本がおかれた状況を最も端的に表す画像情報」と捉え、複製版の解説を著している(同『金海奇観解説大槻磐溪編「金海奇観」と一九世紀の日本」)。

(8) 岩壁義光「近世対外政策の展開と『黒船来航譜』」(『黒船来航譜』所収)。岩壁氏は、「黒船関係」を題材にした来航譜は模写が多く、オリジナルを探すことも困難な場合がほとんどであり、また作者を限定することもきわめて難しい。その理由を想像するに、(中略)本来絵師でない者が描いたケースが多かったため、作者の名が残らなかったのではないだろうか」と指摘している。

(9) この点に関しては、嶋村元宏「ペリー・イメージの成立と展開―画像資料を素材として―」(『神奈川県立歴史博物館編集・発行『ペリーの顔・貌・カオ』「黒船」の使者の虚像と実像)二〇一二年)の指摘に学んだ。

(10) 慶勝の御手許文庫に関しては、岩下哲典「改革指導者の思想的背景―徳川慶勝の書斎、直筆『目録』の分析」(『季刊日本思想史』四三号、一九九四年。のち前掲註(3)岩下著書に所収)を参照のこと。

(11) 旧蓬左二二六―一。

(12) 「禁餘手翰」一(旧蓬左二六―一〇九)。

(13) この点に関しては、麓慎一『開国と条約締結』(吉川弘文館、二〇一四年)、拙稿「嘉永・安政期における徳川慶勝の人脈と政治動向」(徳川林政史研究所『研究紀要』五一号、『金鯢叢書』四四輯所収、二〇一七年)、木村慎平「嘉永・安政期の尾張藩」(羽賀祥二・名古屋市蓬左文庫編『名古屋と明治維新』風媒社、二〇一八年)などを参照のこと。

(14) 前掲註(6) 嶋村論文。

(15) 彦根城博物館編集・発行『井伊直弼―その人と生涯―』(一九九〇年)、同『政治の時代―井伊直弼と幕末の群像―』(二〇〇九年)などに掲載されている。この図の類本に、横浜市中心図書館所蔵の絵図がある。

(16) 付表2―24と同様、雲形がある図に横須賀市所蔵「久里浜応接の絵図」もある(横須賀市史「通史編」近世、二〇一二年、六一八頁)。

(17) 他にも、横須賀市所蔵で同様の彩色図が(同右、六一九頁)、神奈川県立歴史博物館所蔵「黒船絵巻」にも、図2②と同じ構図の絵図が含まれている(嶋村元宏「ペリー来航絵巻について(二)」『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』三〇号、二〇〇四年)。

(18) 「留記」四(旧蓬左二二六―九九・四)所収。

(19) 旧蓬左二二六―一九七。

(20) 渡邊修二郎「阿部正弘事蹟」(一九一〇年、一四五頁)にも、「富津ノ暗礁ハ毎ニ人々ノ目ヲ付クル処ニシテ、閣老ヲ始メ同僚等モ是ヲ埋立ナバ、実ニ屈竟ノ場所トモナリヌベキトテ、此度ノ(本多忠徳の)巡見モ多クハ是ニ係レリ」と記載されている。

(21) 「内海御台場御用留」(大蔵省編纂『日本財政経済史料』巻一、財政経済学会、一九三二年、九五五頁)。

(22) 「聿脩叢書」下(旧蓬左二五―三三)。

(23) 「御尋ニ付建白留」(旧蓬左二二六―六〇)。

(24) 徳川慶勝「日録用要」(旧蓬左二二六―六)。この日記は、嘉永五年二月から同六年正月まで、嘉永六年四月から六月まで、嘉永七年(安政元年)七月から八

月までの記事を収録したもの。

(25) 旧蓬左二二六―一七八。この書は、「表2」「朱丸星黒印御箱目録」所収の18「亜墨利加一条内密書」に相当するか。

(26) この史料を活用した研究に、太田尚宏「使節ペリーへの贈答品と相撲取」(徳川林政史研究所監修『江戸時代の古文書を読む―ペリー来航』東京堂出版、二〇〇九年)、竹内誠「江戸文化と横浜開港」(横浜開港資料館紀要』三〇号、二〇一二年)がある。

(27) 前掲註(9) 神奈川県立歴史博物館編集・発行図録、六三頁。

(28) 同右。六六頁。「合同船入相秘記」に挟み込まれた図は、黒船館所蔵の肉筆彩色「副将アワタムス真図」にも近い(東京都江戸東京博物館編集・発行『ペリー&ハリス』二〇〇八年、五一頁所収)。

(29) 松平春嶽全集編纂刊行会編『松平春嶽全集』二(原書房、一九七三年)、四七八―四八〇頁。

(30) 前掲註(25)と同じ。

(31) 横浜開港資料館編集・発行『ペリー来航と横浜』(二〇〇四年)、三九・四四頁参照。

(32) アメリカ軍人の訓練については、東京帝国大学編纂・発行『大日本古文書幕末外国関係文書之五』(一九一四年、二五八―二五九頁)、西川武臣「史料紹介」日米和親条約締結交渉時に記された林大学頭の従者の日記」(横浜開港資料館紀要』三〇号、二〇一二年)に記載がある。訓練の様子は、真田宝物館編集・発行『松代藩と黒船来航』(二〇一三年、六六頁)に掲載される米国使節彼里提督来朝図絵「上陸兵の操練」を参照のこと。この図は二月一九日の訓練の様子を示したもので、この図の軍服や銃器を持つ格好が、付表3―37とそっくりである。

(33) 松平慶永宛の書状(嘉永七年二月付)で、慶勝は「アメリカと」貢献賜与之物件も有之候由、是は如何之御処置ニや、一円合点之不参事」(「留記」二、旧蓬左二二六―九九・二)と述べている。これと同じ書状は、他にも字句表記の違いがあるが、日本史籍協会編『昨夢紀事』一(東京大学出版会、一九六八年覆刻版)、一八六―一八八頁にも収録されている。

(34) 北村陽子「ペリー提督の上陸用舟艇」(『開国史研究』五、二〇〇五年)。

- (35) S・W・ウィリアムズ(洞富雄訳)『ペリー日本遠征随行記』(雄松堂書店、一九七〇年)、二六二頁。
- (36) 奥村徳義「松濤棹筆」巻四八(旧蓬左三一―八二)。
- (37) 「世統一世紀」(旧蓬左一二六―五四)。
- (38) 大村有隣「名古屋城並尾張藩国防の研究」(助愛社、一九三七年)、岩下哲典「幕末名古屋藩の海防と藩主慶勝」『青山学院大学文学部紀要』三三、一九九一年。前掲註(3)岩下著書に所収などを参照のこと。
- (39) 前掲註(11)と同じ。
- (40) 「官邸便覧写(江戸御屋鋪便覧)」(旧蓬左一三九―三三)。本史料は、「史料紹介」尾張藩邸・御殿の概略・変遷に関する史料(徳川林政史研究所『研究紀要』三七号、二〇〇三年)に収録されている。
- (41) 前掲註(13)木村前掲論文。なお、図10が築地蔵屋敷の部分図であることは、徳川美術館学芸員安藤香織氏からもご教示を得た。感謝申し上げたい。
- (42) 前掲「松濤棹筆」巻六五など。
- (43) 「烈公書翰写」(旧蓬左一二六―一八二)。
- (44) 岸野俊彦「幕藩制社会における国学」(校倉書房、一九九八年)、前掲註(13)木村前掲論文、拙稿「慶応三年における尾張徳川家の政治動向」(徳川林政史研究所『研究紀要』五〇号、『金鯢叢書』四三輯、二〇一六年)などを参照のこと。
- (45) 「炮術論」(徳川慶勝手記)、維新史料引継本Ⅱは―三六二、東京大学史料編纂所蔵。
- (46) 註(32)前掲『大日本古文書 幕末外国関係文書之五』二二八―二二九頁。
- (47) 前掲註(4)NHKプラネット中部編書。慶勝の写真研究については、岩下哲典「徳川慶勝の写真研究と撮影写真(上)(下)」(徳川林政史研究所『研究紀要』二五・二六号、一九九一・一九九二年)、白根孝胤「幕末・維新期における尾張家の撮影写真と技術開発」(同四〇号、二〇〇六年)、同「明治初年における徳川慶勝の動向と撮影写真」(同四五号、二〇一一年)、徳川美術館編集・発行『徳川慶勝―知られざる写真家大名の生涯』(二〇一三年)、前掲註(2)徳川林政史研究所編著などを参照のこと。
- (48) 「器械・器具写真帳」(写真番号六六四―七二三)。「徳川林政史研究所蔵写

真資料目録」二(徳川林政史研究所『研究紀要』二七号、一九九三年)に当該写真群が収録されている。

- (49) 前掲註(13)拙稿、および拙稿「文久・元治期における徳川慶勝の動向と政治的立場」(徳川林政史研究所『研究紀要』五三号、『金鯢叢書』四六輯、二〇一九年)を参照のこと。

- (50) 尾張家本は名古屋市蓬左文庫所蔵。他の大名家では、例えば盛岡藩南部家には「外国人物」(もりおか歴史文化館所蔵)、松代藩真田家には「世界人物録図巻」(真田宝物館所蔵)として伝来した。この図譜は、霞会館資料展示委員会編『幕末の西洋事情』(霞会館、一九八八年)、もりおか歴史文化館活性化グループ編集・発行『盛岡南部家の生き方 第3部―盛岡藩の終焉と南部家が繋ぐ未来』(二〇一八年)、前掲註(32)『松代藩と黒船来航』などに掲載されている。

- (51) 「真写影鏡秘伝 諸品新聞書」(旧蓬左一二六―一二五)。前掲註(47)岩下・白根論文を参照のこと。

- (52) 「御道具・屋敷等写真帳」(写真番号七四六―八三四)。前掲註(48)「目録」二に当該写真群が収録されている。

- (53) 前掲註(5)風説書研究会編著所収の論文。

〔付記〕 本稿脱稿後、名古屋市蓬左文庫にペリー来航関連の図像史料が所蔵されていることが判明した。「アメリカ人衣冠其外図」(異品)(三六―一二二)、「浦賀渡来アメリカ人図」(三六―一二三)と標題がある卷子である。このうち「アメリカ人衣冠其外図」(異品)は、表2で示した徳川慶勝の御手許文庫「朱丸星黒印御箱目録」や「弓矢御本箱」にあったものとわかる。これには、アメリカ人の軍服・軍帽などを個別に画いて彩色を施した図もあり「諸品新聞書」巻二(付表2)に貼付された8・40・43・44・46との関連性を指摘できる。本稿では取り上げられなかったが、改めて検討したいと思う。情報をご提供いただいた木村慎平氏(名古屋城調査研究センター学芸員)と鳥居和之氏(名古屋市蓬左文庫文庫長)に感謝申し上げます。なお、本稿は上廣歴史文化フォーラム「江戸の情報ネットワーク」(よみうりホール、令和元年九月二二日)で発表した「尾張藩主・徳川慶勝の情報ネットワーク」をもとに成稿したものである。

〔付表1〕「諸品新聞書」巻一

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
1 1	第一図戦隊(調練図)				10.2×30.5
1 2	第二図放火二発(調練図)				10.8×30.4
1 3	第三図繰掛り(調練図)				21.5×30.7
1 4	第四図放火二回(調練図)				16.4×30.9
1 5	第五図縦隊(調練図)				11.0×30.9
1 6	第六図戦隊進ミテ放火(調練図)				28.3×26.4
1 7	第七図中央縦隊(調練図)				15.3×31.1
1 8	第八図方陣(調練図)				12.1×14.8
1 9	第九図縦隊ニ返ル(調練図)				13.9×14.7
1 10	十図(調練図)				14.1×30.8
1 11	十一図・十二図二列打(調練図)				14.5×30.7
2 1	オクダンド前面(航海具)		徳川慶勝		22.8×15.8
2 2	(オクダンド横面・部分図とも)		徳川慶勝	㊦がある。	①19.7×8.0 ②12.6×7.2 ③8.7×6.8
3	畳船十分之一図				21.5×36.9
4	(オクダンド部品)		徳川慶勝	2と関連、㊦がある。	15.7×9.8
5 1	畳長持船 一		徳川慶勝	「新造 千賀与八良エ」と記載あり。	10.6×17.3
5 2	(畳長持船 二)		徳川慶勝		12.0×22.1
5 3	(畳長持船 三)		徳川慶勝		11.2×17.0
5 4	(畳長持船 四)		徳川慶勝		7.9×6.4
5 5	長持台		徳川慶勝	「帆ノシン油タン帆ニナル ツリ棒ニテコク」	22.2×10.8
5 6	(コンパス 閉じた状態)		徳川慶勝		21.1×4.3
5 7	コンパツ(コンパス)		徳川慶勝		20.0×13.8
5 8	象眼規		徳川慶勝		15.5×17.0
6 1	迅雷地震天地大変相知道具		徳川慶勝	説明書きと図あり。	①19.7×13.9 ②19.6×3.5 ③17.3×7.6
6 2	度不失法(物を煮る道具)		徳川慶勝	説明書きあり。	19.2×14.7
7	見微鏡(顕微鏡・部品とも)			帖に直接書き込んでいる。	
8	(品川御台場図)			慶勝筆で「品川御台場」と記載される。	31.7×43.4
9	(尾張製造五貫目大砲・車台図)			慶勝筆で「尾陽製造大銃五貫目海岸ニ備図」と記載される。大砲の説明書が貼り付けられている。	31.7×83.7
10 1	(ロシア軍人二人肖像画)			慶勝筆で「魯西亜人ノ図」と記載される。ブチャーチンを描いた瓦版に構図が似ている。	49.6×20.5
10 2	(ロシア軍人行進図)			破損注意。	27.3×49.7
11	(アメリカ蒸気船図)			慶勝筆で「亜墨人船ノズ」と記載される。	27.2×37.4
12	HOLLANDSCHE SCHIP (イギリス軍艦)			慶勝筆で「英船」と記載される。	53.9×40.0
13	(ミンストレル・ショー図)	(嘉永7年)		慶勝筆で「亜人歌舞ズ」と記載される。貼紙あり。	27.4×38.9
14	(ピッチンガー肖像)	(嘉永7年)		慶勝筆「亜人」と記載される。本図に「亜墨利加人寅二月十六日神奈川ヨリ上陸 ビッテンセル寅三十歳ノ像」と記載あり。印2点押印。	33.3×30.3

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
15	ハツテラ船(ボート図)			慶勝筆で「下田御造船 ハツテ イラ」と記載される。	30.8×41.6
16	遍放銃車図(連発銃)	(嘉永4年)	賢樹園のあるし 谷應	摺物、説明書きあり。	35.5×41.7
17	ミヤマホウシロ(鳥図)	安政3年		慶勝筆で「安政三年丙辰五月五 日、鳥屋持参十五トイウ、直ニ 返ス、珍禽ニ付横井氏江写申付 ル」と記載される。	27.6×29.6
18	1 (帆船図)			日の丸が掲げられている。㊤あ り。掛紙あり。	30.6×41.2
18	2 (帆船平面図・側面図)			18-1と同じ㊤が押されている。	30.7×41.8
19	1 地震計(図)			説明書きあり。	21.5×8.6
19	2 地震計(部分図)			説明書きあり。	27.8×16.7
20	1 壁代(図)			関連図とも。	30.5×41.9
20	2 壁代(図)				41.9×30.4
21	アメリカ火管(図)	安政4年		慶勝(梅柳園主人)筆の説明書き あり。	31.7×42.8
22	(熱田魚獵ギシ図)			慶勝筆で「珍魚ノ由ニテ依写置、 植原次郎右衛門写之」と記載さ れる。	25.7×30.4
23	晴雨風ヲ前知スル道具			英文記載あり。慶勝筆で「前知 ハ難分、跡ニテ針向也」と記載 される。	20.7×20.7
24	1 (シャンデリア図)		(徳川慶勝)		5.9×9.6
24	2 (果物入れ具図カ)		(徳川慶勝)		7.1×4.1
24	3 (カメラ図)		(徳川慶勝)		6.4×5.3
24	4 (カメラ図・ランプ図)		(徳川慶勝)		8.3×8.9
24	5 (振り子時計図)		(徳川慶勝)		11.1×4.2
24	6 (シャンデリア図)		(徳川慶勝)		6.4×6.7
24	7 (ラウリールカッシャ揮発油目 方覚)				15.8×12.2
25	御杉戸竹之節等御恰好図面				28.0×40.8
26	江ノ島鎌倉道中記(摺物)	(嘉永6年)	景斎英寿筆・ 藤岡屋慶治郎板	掛紙・別紙あり。若年寄本多忠 徳による海岸巡視の探索書であ る「探索之趣申上候書付」(旧蓬 左126-197)の別紙。	36.5×47.4
27	柳都海岸略図 (江戸内海海防再編図)			摺物。	35.5×47.8
28	東海道神奈川在横浜 御貿易場 (摺物)				31.8×80.3
29	神奈川横浜交易場 曲輪揚屋図 (摺物)				22.9×58.9
30	神奈川横浜交易場 遊里揚屋図 説(摺物)	(安政6年)		「異人交会遊女名前」が記載さ れている。	22.9×57.0
31	1 (調練図)		(徳川慶勝)	1～3ともに帖に直接書き込ま れている。	
31	2 (調練図)		(徳川慶勝)		
31	3 (調練図)		(徳川慶勝)		
32	新版御所御かためよし此ふし (禁裏守衛に関する摺物)			摺物。	18.0×23.4
33	(里言葉・都遊女独案内・都名 物最上家)	元治元年	遊楽舎	摺物。	16.5×34.2
34	当時流行三幅対見立(大繁盛・ 明がない・かいてがない ほか)	元治元年		摺物。	28.0×38.8

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
35	三十石夜船はなし	(元治)	元治亭元歳	摺物。2点あり。	18.7×25.6
36	とりおいかへうた (禁門の変後の御救米につき)	元治元年7月		摺物。	16.9×23.7
37	ないものづくし	(元治元年)		摺物。	25.1×33.5
38	大笑へその為替			摺物。	27.1×38.9
39	大新板都流行はんよぶし初編		笑楽亭板	摺物。	24.5×36.0
40	ぎおんしんち無夜あそび 初編 (大津絵節など)			摺物。	24.4×36.1
41	精魚合戦の段(長州戦争風刺)	(元治元年)	仕田志軒東葉・ 地鯉鮒堂作見板	摺物。	24.6×34.6
42	泰平中国御固附(長州戦争)	元治元年		摺物。	25.9×37.9
43	(水利器械図)	元治元年7月		摺物。説明書きあり。	30.2×41.8
44	長州山口之図(長州戦争・地雷 火など長州武装図)	(元治元年)		山口の砲台布陣の様子を描いた 図	40.0×49.2

〔付表2〕「諸品新聞書」巻二

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
	(見返し)「豆州下田港」(慶勝筆)				
1	異国船近海江卸船并右辺乗廻等之絵 図面	(嘉永6年)		彩色。	38.7×53.7
2 1	(蒸気船部分図・バツテイラ略図)	(嘉永7年)		横浜上陸と記載あり。	27.6×38.0
2 2	(絵図覚)			2-1に包まれたもの。何か不明。	18.7×25.0
2 3	(覚)			2-1に包まれたもの。何か不明	18.7×25.2
3	軍船図(マセドニンアン号か)	(嘉永7年)		36・50と同じ。	28.4×38.3
4	蒸気船使節船(ポーハタン号)	(嘉永7年)			28.5×38.7
5	(ボート砲の砲車で箱を運ぶ図)	(嘉永7年)		説明書きあり。ペリー贈呈品。	27.7×37.7
6	亜墨利加国王の進献之船形大略 (バツテイラ三艘図)	(嘉永7年)		説明書きあり。ペリー贈呈品。	38.7×28.4
7	軍船略図	(嘉永7年)		説明書きあり。星条旗・水桶の図と も。	28.5×38.1
8	(異国人軍帽・軍服部分図)	(嘉永7年)		説明書きあり。	28.4×38.9
9	於浦賀製造相成候船ノ図 (バツテイラ図)			説明書きあり。	27.6×38.9
10 1	(R.ウィリアム墓図)	(嘉永7年)			38.7×27.7
10 2	(R.ウィリアム墓図)	(嘉永7年)			38.9×27.5
10 3	(R.ウィリアム墓図)	(嘉永7年)			38.7×27.5
11	梯子・縄車輪・箱図	(嘉永7年)		ペリー贈呈品。	28.3×38.8
12	異国人 (晴天ノ時上陸図・雨天ノ時上陸図)	(嘉永7年)		説明書きあり。	28.5×38.6
13	(木挽町築地蔵屋敷胸牆設置図)			「八間橋」が記載される。	27.4×38.2
14	胸牆平面上ヨリ臨候略図(砲台)			築地蔵屋敷に配置された砲台。	27.6×38.7
15	薩州 三橋艦之図(昇平丸図)			彩色。	39.8×77.4
16	(大筒少人数ニ而揚ケ候器具)			慶勝筆「東都深井町人勘考」と記載 される。	31.5×44.2
17	官艦 鳳凰丸之図				39.1×38.4
18	軍船略図			7とほぼ同じだが、星条旗の星の数 が違う。水桶の図とも。	27.3×38.4
19	於石川嶋大船御製造半出来略図 (旭日丸半出来略図)				29.8×71.5

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
20	北蝦夷地唐太島アニワ港クシユン コタン場所魯西亜人土壘図				27.9×38.5
21	(脱穀農具ほか3点)	(嘉永7年)		説明書きあり。ペリー贈呈品。	27.8×38.0
22	(ボート砲の砲車で箱を運ぶ図)	(嘉永7年)		5と同じ。ペリー贈呈品。	28.5×38.5
23	(ペリー久里浜上陸図)	(嘉永6年)		彩色。	31.3×43.1
24	(ペリー久里浜上陸図)	(嘉永6年)		彩色。彦根城博物館所蔵「ペリー浦 賀来航図」の類本。	39.9×78.8
25	松平誠丸領分 走水之図 (川越藩相州台場)	(嘉永6年)		彩色。若年寄本多忠徳による海岸巡 視の探索書である「探索之趣申上候 書付」(旧蓬左126-197)と関連するか。	27.1×101.7
26	一二番之砲台(品川台場砲台)			53と関連。	53.3×38.4
27	武州久良岐郡横浜応接場大略之図 取(ペリー再来航ニ付横浜応接図)	(嘉永7年)		48・52と同じ	27.8×40.4
28	(ペリー再来航ニ付夏嶋沖江入込異 国船図)	(嘉永7年)			26.8×38.5
29	軍船略図			7とはほぼ同じだが、水桶の説明に違 いがある。	27.8×38.3
30	(蒸気船図)				53.6×37.6
31	水師提督彼理肖像(ペリー肖像)	(嘉永7年)			43.6×31.8
32	Domme Kragt(ドムメ カラクト)				27.7×38.5
33	相防海岸略図 (ペリー来航・異国船四艘)	(嘉永6年)		彩色。若年寄本多忠徳による海岸巡 視の探索書である「探索之趣申上候 書付」(旧蓬左126-197)の別紙か。	27.2×39.0
34	松平誠丸持場 猿嶋之図 (川越藩相州台場)	(嘉永6年)		彩色。若年寄本多忠徳による海岸巡 視の探索書である「探索之趣申上候 書付」(旧蓬左126-197)と関連するか。	27.2×38.2
35	(ペリー再来航ニ付横浜応接図)	(嘉永7年)			28.4×38.7
36	軍船図(マセドニンアン号か)	(嘉永7年)		3・50と同じ。	28.6×37.6
37	進献船形大略(バツテイラ船三艘)	(嘉永7年)		ペリー贈呈品。6と関連。	38.7×28.4
38	(野戦砲となったボート砲図)	(嘉永7年)		ペリー贈呈品。精巧な模写。	30.0×41.5
39	(横浜応接所見取図)	(嘉永7年)			28.0×40.4
40	(異国人軍帽・軍服部分図)	(嘉永7年)		8と同じ。	28.6×38.3
41	蒸気船使節船(ポーハタン号)	(嘉永7年)		4と同じ。	28.5×38.7
42	蒸気船使節船(ポーハタン号)	(嘉永7年)		4・41と同じ。	27.9×38.1
43	(異国人軍服部分図・バツテイラ図・ 蒸気船部分図)	(嘉永7年)		2・8と関連	28.4×38.5
44	(異国人軍帽・軍服部分図)	(嘉永7年)		8・40と同じ。	28.5×38.7
45	薩州大船図(昇平丸図)	(安政元年)		彩色。付箋あり。	31.1×43.2
46	(異国人軍服部分図・バツテイラ図・ 蒸気船部分図)	(嘉永7年)		43と同じ。	28.4×38.3
47	(船の滑車)	(嘉永7年)		「Bok」と記載される。	27.7×38.5
48	(ペリー再来航ニ付横浜応接図)	(嘉永7年)		虫損あり。27・52と同じ。	27.8×38.3
49	(軍船図)			彩色。30と関連するか。	54.3×37.2
50	軍艦之図(マセドニンアン号か)	(嘉永7年)		3・36と同じ。	28.0×38.2
51	(横浜応接所見取図)	(嘉永7年)		39と同じ。	27.9×38.6
52	武州久良岐郡横浜応接場大略之図 取(ペリー再来航ニ付横浜応接図)	(嘉永7年)		27・48と同じ。	28.0×40.5
53	三番砲台(品川台場砲台)			26と関連。	38.5×53.0
54	(農具)	(嘉永7年)		ペリー贈呈品。	27.4×76.5
55	蒸気船凡型(サスケハナ号か)	(嘉永7年)		説明書きあり。	27.7×39.2
56	俗に時計と而已申触す (蒸気車部分)	(嘉永7年)		説明書きあり。ペリー贈呈品。65 と関連。	28.0×38.4

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
57	(贈呈品農具類か)	(嘉永7年)		説明書きあり。ペリー贈呈品。	28.0×38.2
58	(贈呈品車か)	(嘉永7年)		説明書きあり。ペリー贈呈品。	27.7×38.4
59	(蝦夷地絵図)				55.2×52.1
60	蝦夷図 (クナジリ嶋・エドロフ嶋など)				82.8×38.4
61	(蝦夷地絵図)			運上屋・掛洞・番所の記載あり。	55.4×38.3
62	(北方諸島絵図)	寛政3年9月	秦鼎		39.3×38.4
63	(蝦夷および周辺図)				28.0×38.7
64	(横浜村浜手応接場右手の円形場)	(嘉永7年)		棒杭の記載あり。	28.0×38.5
65	(贈呈品・蒸気車部分)	(嘉永7年)		56と関連。説明書きあり。ペリー贈呈品。	28.0×38.7
66	ALBUM D ARMES(小銃の図)	(嘉永7年)		綴。カラベインほか銃器の名前書付	12.6×19.1
67	軍艦凡型	(嘉永7年)		彩色。説明書きあり。	26.8×38.9
68	(ペリー再来航ニ付神奈川滞船八艘)	(嘉永7年)			27.4×39.1
69	アハダムス(アダムス肖像)	(嘉永7年)			43.8×32.0

〔付表3〕「諸品新聞書」巻三

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
1	韃靼(ダツタン・蒙古)		(徳川慶勝)	彩色。実際は「大明」の絵を写したもの。	27.6×17.6
2	翁加里亜(ランカリア・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「欧羅巴」と記載あり。	27.6×17.1
3	小人(セウジン・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「同前 小人 波智亜」と記載あり。	27.6×16.4
4	答加沙谷(タカサゴ・台湾)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「唐土」「国姓爺住居ノ地」と記載あり。	27.6×16.8
5	亜爾黙尼亞 (アルメニヤ・西天竺)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「天竺ノ西」と記載あり。	27.6×17.8
6	馬加撒爾 (マカサル・呂宋南の島国)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「呂宋ノ南ニ当ル」と記載あり。	27.7×18.0
7	莫臥爾(モウセ・南天竺)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「天竺ノ内」と記載あり。	27.6×18.0
8	刺答蘭 (ラタラン・日本東南海の島国)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「東南島国也」と記載あり。	27.7×17.8
9	亜媽港臥亜波爾 (アマカウゴアボル・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「島国」と記載あり。	27.6×17.6
10	伯刺西爾 (ハラジイル・南亞墨利加)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「南亞墨利加」と記載あり。	27.6×18.5
11	度爾格人(トルコ・天竺西)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「天竺西北ニ当」と記載あり。	27.8×17.2
12	清人(唐土)		(徳川慶勝)	彩色。	27.6×18.2
13	和蘭陀人(ランダ・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。	27.5×17.5
14	大明国		(徳川慶勝)	彩色。実際は「大清」の絵を写したもの。	27.6×17.6
15	亜細亜		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「魯西亞人武卒」「船頭」「使節レサノツト」と記載されている。	27.6×17.0
16	(半天図柄)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「新地日雇かんばん」「日雇頭取」「日雇 陸ト船ハカハリアリ」などと記載あり。	27.6×17.8

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
16	(半天図柄)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「文武各官補服天青色 職之大小看前後心補子分別」と記載あり。	27.5×18.5
17	為匿亜(ギネイヤ・利米亜)		(徳川慶勝)	彩色。	27.6×17.8
18	加拂里(カフリ・利米亜)		(徳川慶勝)	彩色。	27.5×17.4
19	東京(トンキン・唐土)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「属唐土」と記載あり。	27.6×17.6
20	大清		(徳川慶勝)	彩色。実際は「韃靼」の絵を写したもの。	27.4×17.5
21	工答里亜 (ゴントウリア・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。	27.5×17.2
22	莫斯科米亜 (ムスコフビイヤ・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「欧羅巴」と記載あり。	27.5×17.3
23	槃朶(ハンダ・蘇門答刺に近い)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「島国」と記載あり。	27.6×17.3
24	朝鮮(チャウセン)		(徳川慶勝)	彩色。	27.4×17.8
25	長人(チャウジン・南亜墨利加)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「南亜墨利加」と記載あり。	27.5×17.6
26	羅烏(ラウ・南天竺)		(徳川慶勝)	彩色。	27.6×17.5
27	暹羅(シヤムラウ・天竺)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「天竺ノ内」と記載あり。	27.5×17.7
28	阿勒戀(アロレン・南亜墨利加)		(徳川慶勝)	彩色。	27.6×17.3
29	亜費利加(アピリカ・利米亜)		(徳川慶勝)	彩色。	27.5×17.0
30	波羅尼亞(ボロニヤ・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「欧羅巴」と記載あり。	27.5×17.5
31	大泥亜(タニヤ・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「欧羅巴」と記載あり。	27.6×17.4
32	百兒齊亜(ハルシヤ・亜細亜)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「亜細亜」と記載あり。	27.6×17.1
33	亜瓦的革 (アガレカ・南亜墨利加)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「南亜墨利加」と記載あり。	27.4×16.8
34	加拿林(カナリン・亜墨利加)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「亜墨利加」と記載あり。	27.5×16.9
35	拂郎察(フランス・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。	27.5×17.4
36	齊爾瑪尼亞 (ゼルマニア・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「欧羅巴」と記載あり。	27.5×17.8
37 1	(士官行進側面図)		(徳川慶勝)	慶勝筆で「クロ革」「水牛皮」「萌黄或浅黄」などと記載あり。	27.9×14.0
37 2	(士官肩に筒正面及び側面図)		(徳川慶勝)	慶勝筆で「二 肩江筒」と記載あり。	28.0×18.6
37 3	(士官筒置き正面図)		(徳川慶勝)	慶勝筆で「七 トレハヤコキレハヤコ」(号令か)と記載あり。	27.7×10.3
37 4	(士官筒置き正面図)		(徳川慶勝)	慶勝筆で「八 コメハヤコ スケコミヤ ツケ、ヲサメコミヤ」(号令か)と記載あり。	27.8×18.4
37 5	(士官筒構え正面図)		(徳川慶勝)	慶勝筆で「十 子ラヘ」(号令か)と記載あり。	27.7×18.6
37 6	(士官筒構え正面図)		(徳川慶勝)		27.9×16.2
37 7	(士官抱え筒・捧げ筒正面図)		(徳川慶勝)	慶勝筆で「四 抱筒」「三 サ、ケ筒」と記載あり。	27.8×18.7
37 8	(士官気を付け・下げ筒正面図)		(徳川慶勝)	慶勝筆で「一 キヲ付正隊」「五 サケ筒」と記載あり。	27.7×19.0
37 9	(士官筒構え図)		(徳川慶勝)	慶勝筆で「九 カマエ子ラヘ」「六 カマヘ筒上打金カン付 ヲロセ打カ子ツ、左」と記載あり。	27.9×16.0
38	(比里太尼亞・欧羅巴)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「欧」と記載あり。	27.6×17.7
39	呂宋(ロソン・台湾南の島国)		(徳川慶勝)		27.7×18.2

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
40	爪哇(ジャワ・唐土南西方)		(徳川慶勝)		27.7×17.6
41	蘇門答刺 (スマンダラ・爪哇国の北)		(徳川慶勝)		27.7×17.7
42	撒兒木(ザルモ・西天竺)		(徳川慶勝)		27.7×17.6
43 1	琉球(リウキウ)		(徳川慶勝)		27.7×17.7
43 2	琉球(リウキウ)		(徳川慶勝)		27.7×18.0
44	諒厄利亞(インギリヤ・欧羅巴)		(徳川慶勝)		27.7×18.1
45	兀良哈(ワランカイ・朝鮮北東)		(徳川慶勝)		27.7×18.0
46 1	(品川台場予定図)	嘉永6年秋	(徳川慶勝)	慶勝筆で「嘉永六年秋癸亥 今度品川築立之図」と記載あり。一番から十一番までの台場が記載される。	27.7×34.8
46 2	(台場寸法書上図)	(嘉永6年) 8月25日	(徳川慶勝)	慶勝筆で坪数・形状・寸法などが記載されている。	①27.7×17.8 ②27.7×17.9 ③27.7×18.1 ④27.7×18.2 ⑤27.7×18.1
47	意太里亜(イタリア・欧羅巴)		(徳川慶勝)		27.7×17.8
48	ボイセンデレーケル		(徳川慶勝)	慶勝筆で「是ハ玉ノセンヲ抜モノ也」と記載あり。	27.7×35.7
49 1	(アメリカ人久里浜上陸図)	(嘉永6年)		「アメリカ人久里浜上陸 総人数五百余人」などと記載あり。嘉永6年8月22日付で竹腰正富が提供した図か。	28.2×35.4
49 2	(久里浜陣図)	(嘉永6年)		「久里浜陣推 惣人数千百余人」などと記載あり。嘉永6年8月22日付で竹腰正富が提供した図か。	28.0×35.8
49 3	(アメリカ蒸気船図)	(嘉永6年)		嘉永6年8月22日付で竹腰正富が提供した図か。	28.0×37.9
50	(船内各部位図)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「万力」「碇」「石火矢サマ」「拂郎機 紅毛ニテカノント云」	27.6×17.7
51	西洋記元千七百七十二年「デー子マルカ」国ノ兵士「アマツク」島於テ迦農砲ニテ放ツ玉ノ木ヲ貫ク力ヲ試ミタル表				①28.0×6.4 ②28.1×15.1 ③28.1×17.9 ④28.1×19.2 ⑤28.2×18.3 ⑥28.1×18.5
52	(西洋砲・砲台・砲丸など研究備忘録・図)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝の筆で西洋砲の説明などが記載されている。銃の種類を書き付けた紙片(12.3×18.7)が挟み込まれている。	①26.1×15.2 ②27.7×17.1 ③27.7×17.3 ④27.7×17.1 ⑤27.8×17.1 ⑥27.7×17.5 ⑦27.7×15.0 ⑧27.8×36.8 ⑨27.7×17.8 ⑩27.7×17.8 ⑪27.8×16.3 ⑫27.6×16.1 ⑬27.8×17.1 ⑭27.7×16.7 ⑮27.8×18.8 ⑯27.7×18.1 ⑰27.8×15.4 ⑱27.9×16.8 ⑲27.7×34.9 ⑳27.7×18.9

番号	標題	年代	作成	備考	寸法 (縦×横) cm
53	(カピタン関係の図)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「下着」「メリヤス」「襪 ターヒス」「履 モイル」「袴 フルーク」「裨 ラントルフルト」「踏絵」「カヒタン居宅玄関前燈籠」などが記載される。	①27.8×17.3 ②27.7×18.6 ③27.5×16.6 ④27.6×18.5 ⑤27.6×18.2 ⑥27.8×17.9 ⑦27.5×17.6 ⑧27.5×15.9 ⑨27.5×18.0
54	唐船図		(徳川慶勝)	彩色。	27.7×34.2
55	和蘭陀船		(徳川慶勝)	彩色。	27.7×35.0
56	南京船 本名砂船		(徳川慶勝)	彩色。	27.6×34.2
57	(カピタン関係の図か)		(徳川慶勝)	彩色。慶勝筆で「硝子障子」「タンフキ」「硯図」と記載される。	27.6×17.9

徳川慶勝「諸品新聞書」に関する一考察